高松スタイル

Anki

［あんき］

Takamatsu Style Anki

創刊号

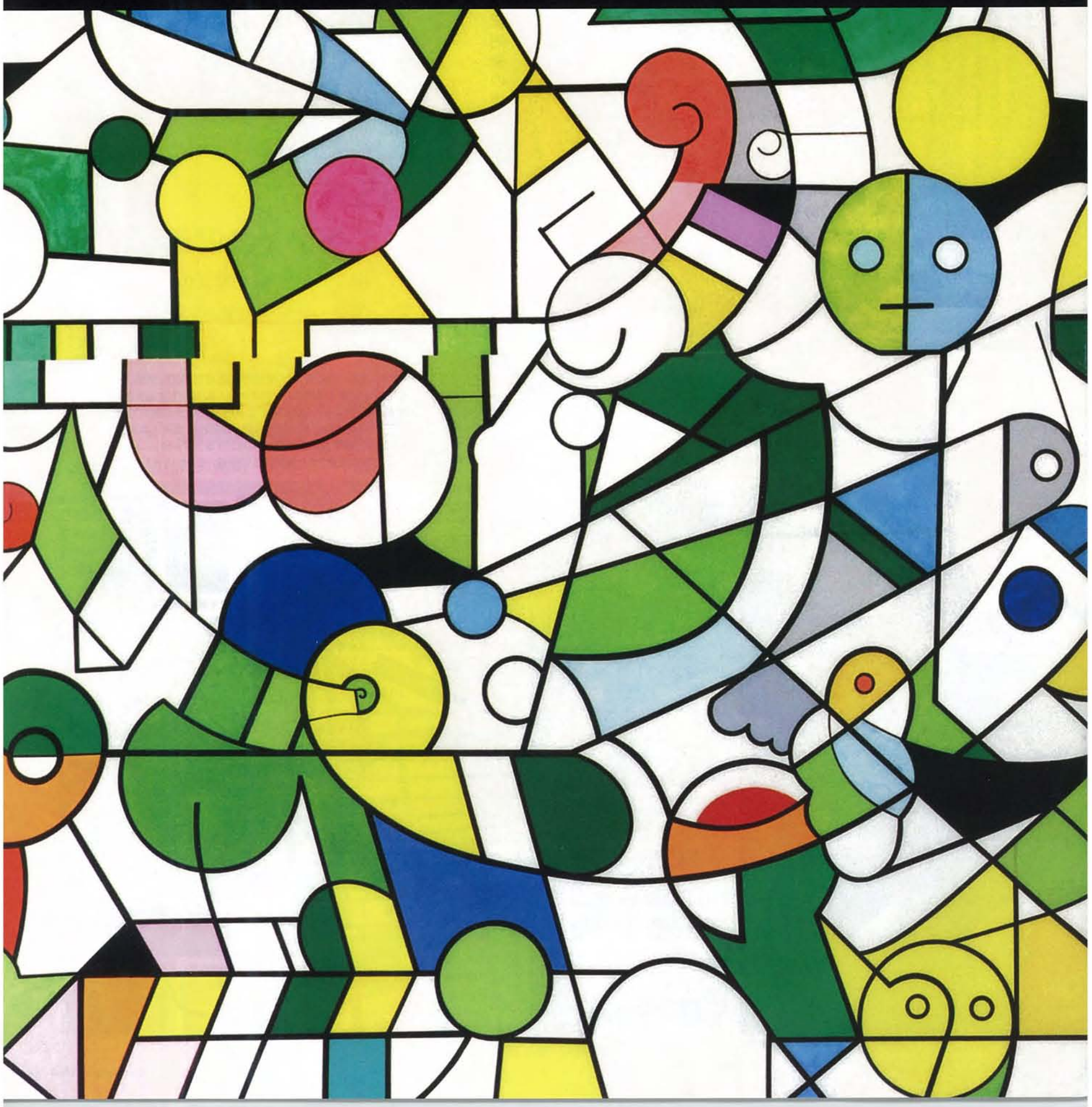
Vol.01 December 2006

特集・高松の老舗商店街が大変身

・初登場のBIGドームは全面ガラス

・四国初、三國シェフのフレンチ

・驚きの「不思議井戸」は江戸初期に掘られた



玉藻城のお濠脇に住んでいた向田邦子

高松の社宅には、隣りがなかった。
父の会社(注1)が玉藻城のお濠に隣り合って建っており、
そのうしろに社宅があって、片隣りは海軍人事部(注2)であった。
前には大きな改正道路(注3)、
まわりは裁判所(注4)や空地で隣近所は無いも同然であった。
私の勉強部屋は二階にあり、
窓から海軍人事部の中庭が見えた。
時々、七、八人の若い海軍士官が銃剣術の稽古をしていた。
稽古といっても半分遊びのようで、のぞいている私に気づくと、
おどけて拳手の礼をする士官もいた。私も敬礼を返した。
その中で、一番背の高い士官は、ひときわ颯爽と見え、
その人に敬礼されると背筋がスウッと粟立つような気がした。
私は女学校(注5)一年生であった。(中略)
由緒ある城のお濠が、お勝手と茶の間の出窓の下に
隣り合っているというのは、ひどく贅沢な気分になるものである。
冬は寒風が上ってくるし、夏場は蚊も多い。

「隣りの匂い」向田邦子著 より

(注1) 父の会社……昭和16～17年、第一徴兵保険の高松支店長として赴任。
(注2) 海軍人事部…正しくは佐世保鎮守府高松地方海軍人事部。
四国4県からの志願兵の募集や、
遺族援護、海軍思想の普及等が主な業務だった。
(注3) 改正道路……現在の中央通り。昭和14年に皇太子成婚記念道路として
玉藻町と兵庫町の間が開通。
(注4) 裁判所……高松地方裁判所、当時も現在と同じ場所にあった。
(注5) 女学校……香川県立高松高等女学校(現香川県立高松高等学校)。

photo:仁田貴夫

◀「戦災(昭和20年7月)前の高松市住宅地図」には、原稿に書かれた社宅跡や海軍人事部などが記されている。当時はまだお濠の側を電車は走っておらず、昭和23年に高松琴平電気鉄道が開通した。
□が社宅跡と第一徴兵保険 高松支店、海軍人事部。
(左図は、「戦災前の高松市住宅地図を復元する会」により平成13年に復元された地図を元に作成しました。)

［季刊誌］
Takamatsu Style
Anki
December
2006
創刊号

高松スタイル Anki

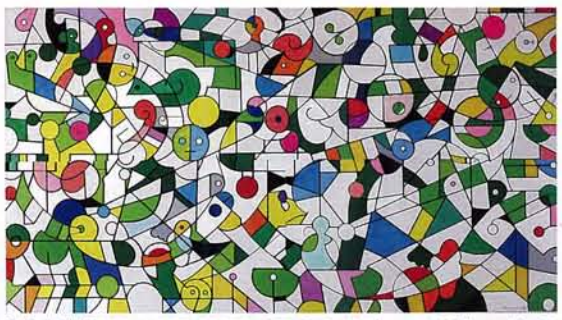
Vol.01 December 2006［あんき］

【安気（あんき）】
心に苦しみがなく、気楽でのんびりしていること。また、そのさま。讃岐弁では、のんびりと心晴れやかな人のさまを表して「安気でええのう」という風に使う。高松スタイル「Anki」は、讃岐の暮らしの中に眠る"日常の豊かさ"に光をあてながら、新しい高松ライフを提案する大人の文化情報誌です。

C O N T E N T S

特集 壱番街19店が開業
ガレリアドームの元祖はローマ時代‥04
三國清三のライバルは讃岐うどん‥‥06
SHOPの顔 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥08
松風庵かねすえ／代表取締役社長 包末招さん
GINCHO and Fullhouse／店長 樫村宏治郎さん
壱番街の新店一覧 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥10
アーティスト・川島 猛が乗り出す‥‥‥12
30年後に訪ねた丸亀町 ‥‥‥‥‥‥‥14
■HISTORY
さぬきの歴史を探る【I】‥‥‥‥‥‥‥16
壱番街で江戸の大井戸発見
■LIFESTYLE
いただきさん ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥18
■OPINION
コンパクトシティって ‥‥‥‥‥‥‥‥‥20
■VOICE
商店街に物申す ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥22

◎表紙作品



川島 猛 作「DREAM HOPE,POSSIBLE-TIME IS NOW」 2004年制作 アクリル画
香川県立高松桜井高等学校創立10周年記念制作

川島 猛 かわしま たけし

川島 猛さんが、香川県立高松桜井高等学校の後援会から、同校創立10周年を記念して、制作を依頼された。華やかなキャンディーカラーが若々しく躍動し、見る者が楽しくうきうきした気分になる作品。今も、高松桜井高等学校正面玄関ロビーに飾られている。

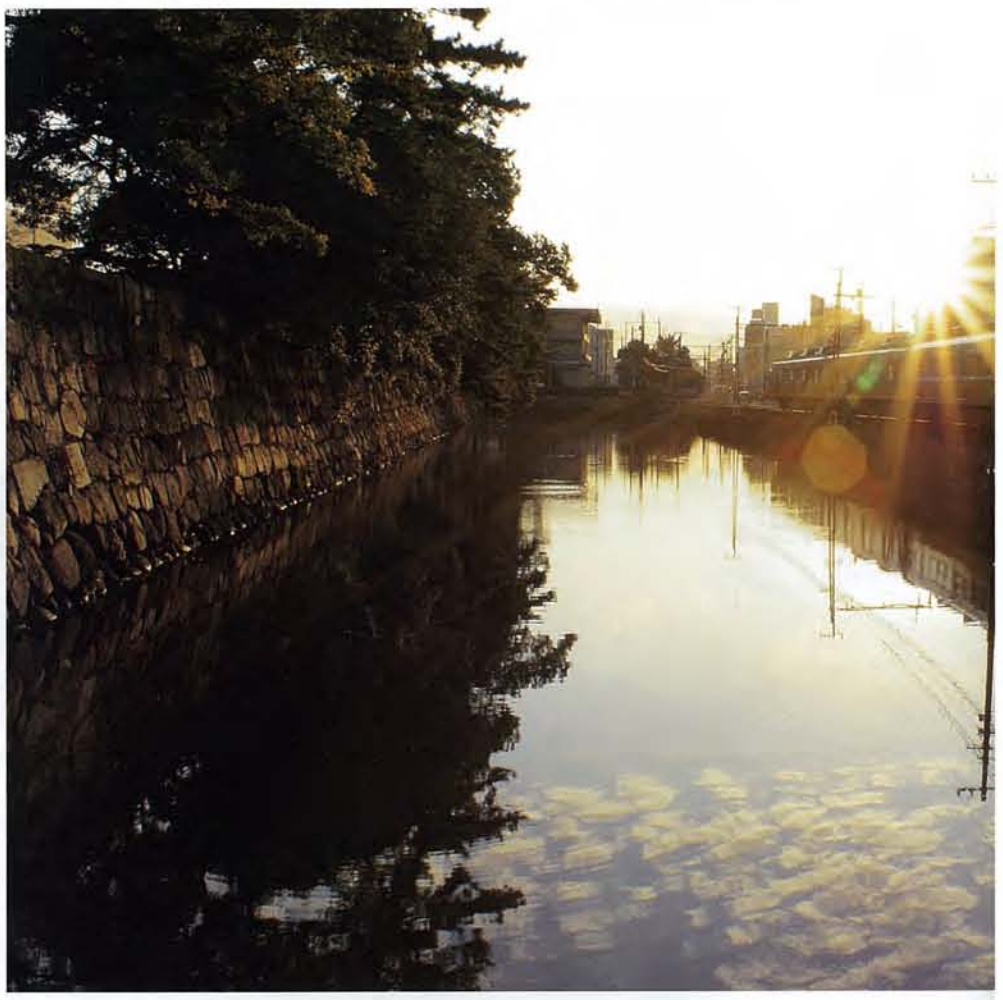
向田邦子は昭和4年、東京都世田谷区に生まれた。父親の転勤が多かったため、小学校だけでも4つ、生涯で15カ所も居所を変えている。そんな中、小学校6年から女学校1年の1学期までの約1年半、高松市内に住んでいた。当時社宅のあった場所を訪ねてみると、現在は高松中央通りビル（最近まで岡山放送四国支社が入っていた。旧高松東邦生命ビル）が建っており、社宅はこのビルの裏側にあったようだ。周辺にはオフィスビルが林立し当時の面影をたどることは難しいが、玉藻城のお濠は今も変わらず深緑の水を湛えている。

高松市立四番丁国民学校（現高松市立四番丁小学校）に通っていた向田は、『父の詫び状』の中で、兵庫町にあった刺繍店に触れている。きっと小学校から少し寄り道をして華やかな商店街を通って帰るのがお気に入りだったのかもしれない。ランドセルを背負ったおませな少女が歩いた商店街は、今日も行き交う人で賑わっている。

写真提供 文藝春秋

向田邦子 むこうだくにこ
（脚本家・エッセイスト・小説家）
雑誌編集者を経て、ラジオやテレビの脚本家として一躍有名になる。代表作は『時間ですよ』『寺内貫太郎一家』『阿修羅のごとく』他多数。また初の連作小説で第83回直木賞受賞。昭和56年台湾旅行中の航空機事故で死去。

向田が住んでいた頃は、市内電車（路面電車）が現在の県庁通りを築港から栗林公園までゆったりと走っていた。戦後の近代化によって市内電車は昭和22年に廃止。その翌年、高松琴平電気鉄道の高松築港駅と瓦町駅間が開通。便利な暮らしと引き換えに、お城とかつての城下町であった商店街は分断されてしまったが、もし向田が生きていたら、今の姿をどう思っただろうか。



ミラノ並みの大ドーム来春お目見え

「パンテオン内部の空気はひんやりと湿っていて、歴史の重みを感じさせた。果てしなくひろがった天井が、重量などないかのように頭上に浮かんでいる。百四十一フィートの支間はサン・ピエトロ大聖堂の大円蓋よりもさらに広い。洞穴に似た堂内に足を踏み入れたとき、ラングドンはいつものように寒気を覚えた。工学と芸術の驚くべき融合だ。天井には有名な円形の穴があいていて、夕刻の陽光が細く差しこんでいた」

（「天使と悪魔」／ダン・ブラウン著／越前敏弥訳／角川書店から）

・

ハーヴァード大で宗教象徴学を教えるロバート・ラングドン教授が、ダ・ヴィンチの絵画に込められた暗号を解きながら、複雑な謎を明かしていく世界的なベストセラー「ダ・ヴィンチ・コード」。「天使と悪魔」はラングドンシリーズ第一弾で、ヴァチカンを舞台に「科学と宗教の対立」という歴史的なテーマを壮大なスケールで描いている。「ダ・ヴィンチ・コード」を凌ぐおもしろさとも評されており、知力と体力を尽くして事件の真相に迫るラングドン教授がここでも活躍する。

「ダ・ヴィンチ・コード」「天使と悪魔」に共通するのが、ストーリー展開の速さと舞台となった街並みの巧みな描写だ。「天使と悪魔」ではローマに残る教会や広場が登場する。世界有数のドーム建築物「パンテオン」もその一つだ。それにしても、古代の遺跡群が今に息づく現代ローマの魅力には圧倒させられる。

街路を市民が憩う広場に

長々と横道に逸れてしまったが、パンテオンのような街のシンボルとしてのドーム建築物が高松市にも誕生するという。早ければ来春にも…。高松丸亀町商店街振興組合などが約20年の歳月を費やして進めている再開発事業の一環で、市民らが親しんできた三町ドーム（丸亀町・兵庫町・片原町の三商店街が接する地域）を全面的に改修して、街路空間を市民が集い憩える広場にグレードアップする。

全国的にも珍しい商店街ドームは、直径25m、高さ33m。イタリア・ミラノのガレリア（直径38m、高さ49m）に匹敵する規模を誇る。

ドームと言えば、東京ドーム、福岡ドーム、ナゴヤドーム、大阪ドームなど、プロ野球でお馴染みのドーム・スタジアムを思い浮かべる人は多いだろう。日本では1988年の東京ドーム誕生以降にドームという言葉が定着した感が強い。

ただ、ドームの始まりは紀元前7000年前まで遡ると言われる。それほどに古い。とはいえ、そのころはドーム建築というものとは程遠い、おそらくは土や泥を練り上げて、ドーム上に固めたような「小さな家としての空間」にすぎなかったようだ。専門書によると、ドーム建築の起源は紀元前1300年前に切り石を積んで造られたギリシャ・ミケーネの「アトレウスの宝庫」と記されている。

そして本格的なドーム構造の原点となったのが冒頭のパンテオンだ。「すべての神々の神殿」を意味するパンテオンは、紀元前27年にローマの将軍アグリッパによって建てられた。

その後焼失したが、五賢帝の一人のハドリアヌス帝が当時の建築技術の粋を集めて再建。半球ドームは直径、高さともに約43m。これを上回るドームが建てられるのは19世紀に入ってからで、「パンテオン」は1700年以上も世界最大のドーム建築物の座を死守していた。

街と人をつなぎ直す象徴

屋内空間だが、屋外の開放感も合わせ持つ体感上の不思議さ、内部に支柱などを一切持たない構造上の不思議さなどが相まって、ドーム建築は古くから「象徴的な建築物」だった。そのため、権力者が、その権威を誇示する建築物として築造してきた。キリスト教やイスラム教などの宗教建築にも同じ狙いから広がる。ローマ建築やビザンチン建築による大聖堂、イスラムのモスク…。人々が集い祈りを捧げる「神聖な大空間」はドーム建築物が多い。

時代が下り、ドーム建築物は設計・施工技術の発展によって、飛躍的に大きくなっていく。それは住む空間、祈る空間、集う空間、観る空間として移り変わり、20世紀には、ショッピングセンターやスタジアムなど大規模な集客施設としての巨大なドームが出現する。ただ、時代とともに技術レベルが進化しても、ドームは人の営みを包み込む建築物として築造されてきたことだけは今も昔も変わらない。

ミラノのガレリアは、1867年にイタリア統一を記念して造られた（第二次世界大戦時に破壊されたため、現在のドームは1955年に完全復元されたもの）。

ドームは時代の転換期に建てられ、その時代の世界観を強く表現している。それでは高松市に誕生するガラスのドームは何を象徴しているのだろうか。

丸亀町商店街の再開発事業は「街の再興」を目指して、持続可能な街を再構築しようと、地権者、商業者、そこに暮らす生活者らが、街に求められる機能を見つめ直し、新たな街との関係性を追求し続けている作業に他ならない。街は人とともに成長する。人も街とともに成長する。そして、街には人々が集う「広場」や「通り」が欠かせない。街の再興には商店街が本来持っていた「集い」の機能を取り戻さなければならない。今回の再開発でドームを整備する意義はこの辺りにある。

そうなると、高松市のドームはここで暮らす人々と街との新たな関係性を象徴していると言えるだろう。街と人々をつなぎ直すドームが誕生する。

（小島 遼）

ミレニアムドーム ロンドン

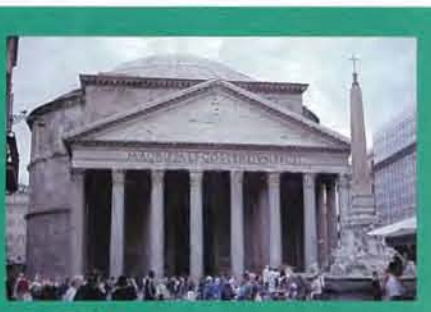
2000年にロンドンで開かれた西暦2000年博覧会。その会場の中心に建設されたのがミレニアムドーム。12のパビリオンのすべてを覆ってしまうケーブルで吊るされた膜屋根は、直径364m、中央の高さは50m。その後の転用が検討されたが、あくまで博覧会開催期間の1年のために造られたものであることなどから、2000年12月に閉鎖。

ドゥオーモ フィレンツェ

大聖堂「ドゥオーモ」と呼ばれる。アルノルフォ・ディ・カンビオによって1296年に起工された。その後ジョット、フランチェスコ・タレンティに引き継がれ1436年、天才建築家ブルネッレスキのクーポラ（大円蓋）によって全長153メートル、幅38メートルの大聖堂が完成。ローマのサンピエトロ、ロンドンのサンパオロ、ミラノの大聖堂に次ぐ、世界で4番目の規模をもつ。

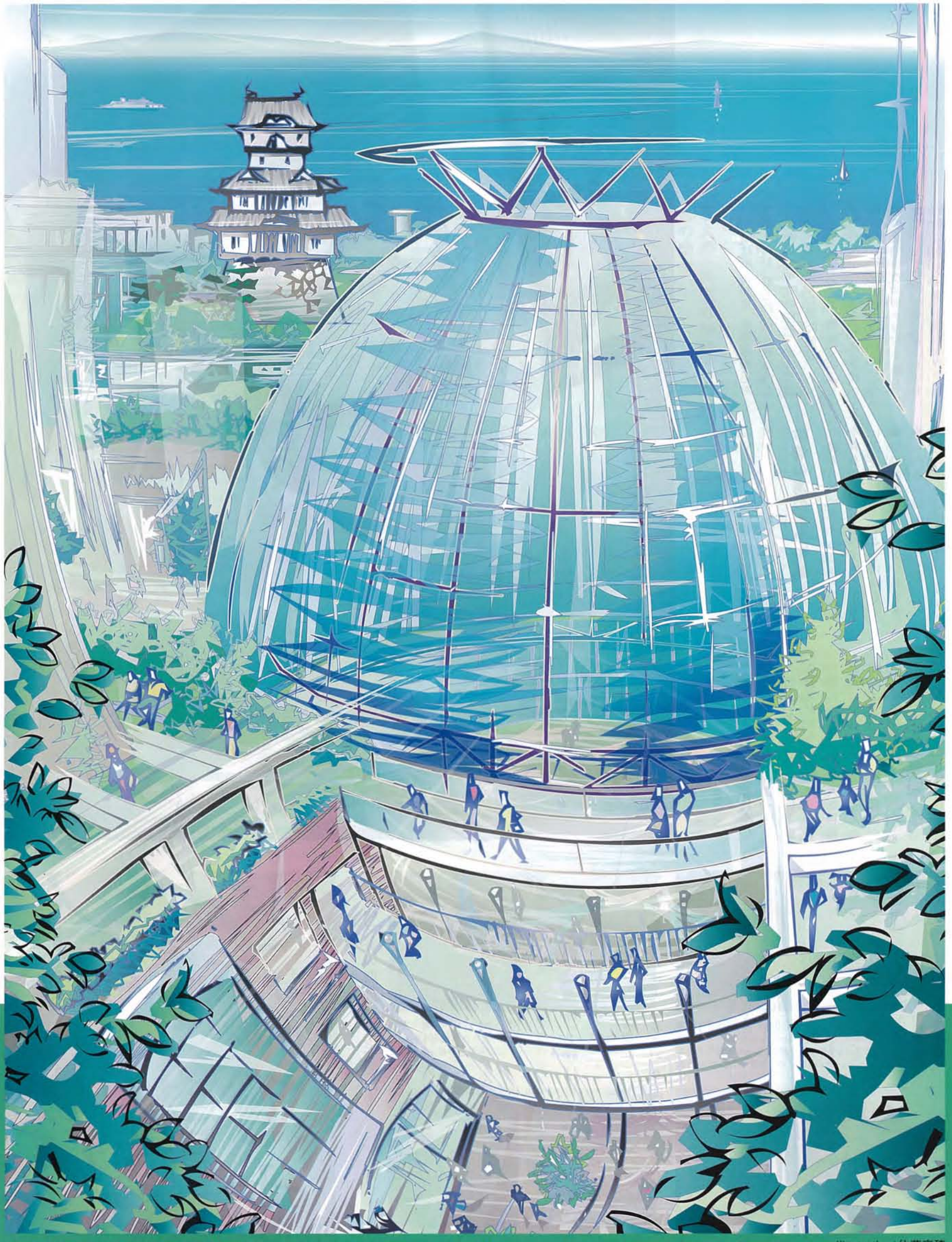
ガレリア ミラノ

1867年にイタリア統一を記念して造られ、第二次世界大戦の時に破壊される。1955年に元の姿で完全に復元。鉄とガラスで架けられた屋根を持つアーケードは、南北に197m、東西に105mの通路からなる。交差部には八角形の広場があり、この上部に、直径38mのガラス張りのクーポラ（円蓋）がのり、頂部は49mにも及ぶ。



パンテオン ローマ

紀元前27年に建設され、古代ローマ、ハドリアヌス帝（117-125）の時代に当時の建築技術を結集して再建された神殿。128年完成。半球ドームは直径43m、高さ43m、クーポラ（円蓋）の直径は、8mにも及ぶ。その大きさでは19世紀に入るまで世界最大の建築であった。教会建築ばかりでなく、世界のドーム構造の原点として、現在に至るまで大きな影響を与える。



高松市の中心部にできる本格的なガラスのドーム。それは高松城のように街のシンボルとなり、街と人をつなぎ直す象徴となるだろう。丸亀町北端の再開発ビルから北を望む時、市民らが集い憩うドーム越しに、復元された天守閣の雄姿がそびえる日が待ち遠しい

illustration：佐藤高穂

「オテル・ドゥ・ミクニ」オーナーシェフ　三國清三さん

「ライバルは、やはり讃岐うどんです」

東京四ツ谷の閑静な住宅街にある
「オテル・ドゥ・ミクニ」。
日本のグルメを始め海外の有名人も多く訪れ、
本場ヨーロッパ人の舌も唸らせる
文字通り日本の三ツ星レストランだ。
その「ミクニ」がこの度、
壱番街のレストランをプロデュースする。
「フランス料理の神様」と呼ばれる5人の料理人に学び、
帰国後、80年代にはグルメブームの寵児として
一躍フレンチ界に革命を起こした。
その非凡な料理人のルーツを聞いた。

三國は昭和29年、北海道増毛町で生まれた。増毛町は札幌市内から北西へ車で3時間弱、かつてはニシン漁で栄えた漁師町だ。

「うちはおやじが漁師でおふくろが農家でしたからね。小学校の頃からよく家業を手伝いました。船の上ではウニやアワビを獲り、畑ではおやつ代わりに青いトマトをかじる。食べ物が自然の中でどんな風に育ち、どんな風に人の手に渡っていくかを体で学びました」

故郷の海のホヤの味

漁から帰ってくると捕った魚を背負って、たった1人で市場に売りに行く。子どもには重労働だったが、仲買人から魚を誉められると何より嬉しかった。海が時化た日には知恵を絞り、より選ったアワビを直接料亭に持ち込んで料理人から買ってもらった。真冬でもいい匂いと温かな湯気が立ち上る厨房の風景への憧れが、後に料理人を目指す原点になったと言う。そんな三國には、子ども時代の忘れられない味がある。

「台風の翌日なんかに海に行くと、よくホヤが打ち上げられていてね。それをさっと海水で洗って生のまま食べるんです。独特のえぐみがあってうまかった。ホヤは世界で唯一、甘味、酸味、塩味、苦味の4味を備えた食べ物なんです。人間の味覚は12歳ぐらいまでに作られると言いますから、僕はホヤで舌を鍛えたんだと思います」

中学卒業後は、札幌市内の米屋に住み込みで働きながら調理師

料理人・三國の代表作。
和牛ヒレ肉の霜降り、ボルドレーズ“ボリーマヌ”

専門学校に通った。青年の目には「宇宙」かと思うほど眩しかった都会の風景。洋食と初めて出会ったのもこの街だった。そして15歳で洋食の料理人を目指し、なんと自ら直訴してホテルの調理場に就職する。「今も自分の前には道はないと思っています」との言葉通り、彼はいつも体当たりで挑んできた。

5人の「料理の神様」との出会い

ヨーロッパ行きの転機は20歳。帝国ホテル時代、2年間鍋洗いしかしたことのない若者が突如駐スイス日本大使館付きの料理長に抜てきされる。当時の総料理長であり日本のフランス料理界の第一人者でもある故村上信夫氏にその仕事ぶりと素質を認められての人選だった。そして期待通り、彼は着任後たった1週間で見事最初の晩さん会を成功させ、以後8年間、本場のシェフでも難しいという三ツ星レストランの門を叩き、超一流シェフたちの下で腕を磨いた。しかし、さすがに臆する事はなかったのだろうか。

「そりゃ手元をチラリと見られただけでもう体が動かなかったですよ。確かに彼らとコミュニケーションを持つことは難関ですが、それよりも難しいのは彼らに認められること。めったにプロとして認めないですからね。その彼らに認めてもらうには、自己犠牲、自分を捨てることです。そしてその人のために全力を尽くす。神様ですから、邪念があればすぐわかるんですよ」

まっすぐな眼差しが実直な人柄を物語る。

そんな彼が、立ち直れないほど衝撃を受けた出来事がある。それは5人目の神様アラン・シャペルから言われた一言。

「厨房で作業している横でボソッと"セ・パ・ラフィネ"と言われたんです。つまりきみの料理は洗練されていないと。当時最も神に近い料理人"厨房のダ・ヴィンチ"と言われた人に言われたんですよ。それは僕自身を否定されたのと同じこと。今までの全てを失うほどショックでした」

あるがままの料理

何故だろう?それから1年、答えを求めて黙々とシャペルの厨房で働き続けた。そしてある日、フランス人を真似るのではなく日本人として自分の料理を作ればいいんだと気づく。

「帰国する時シャペルは何も言いませんでした。でもそれから数年後、四ツ谷の店に食べに来てくれましてね。知人に"ミクニは自分の弟子だ"と自慢そうに話していたと聞いて、あの時逃げ出さなくてよかったと思いました」

こうした苦悩の上に、80年代、三國の新たなフランス料理が開花した。

皿の上から世界を見る

現在の三國は特にフランス料理を作っている意識はないという。「キュイジーヌ・ナチュレル=自然と同化した料理」。自然の恵みに感謝して素材そのものを活かした料理。それが彼の目指すもの。そのためには、皿の上だけに留まらない。食材の育つ環境をより良くしようと早くからスロー運動を謳い、生産者と連携して地産地消にも力を入れた。さらに人間の感性が開く原点が幼少期の味覚形成にあると、6年前から食育にも尽力。そして今一番力を入れているのは、世界の子どもたちの飢餓問題。なぜそこまでするのか?

「素材だけを見ても本質はわかりません。食材はあくまでも結果、その背景にある環境や人が豊かになることが、本当に素材を活かすということだと思うんです」

三國にとって「料理をつくること」は哲学であり、生きることそのもの。だからどうしても放っておけないのだ。

高松への思い

最後に、なぜ今回高松への出店を決めたのか、こっそり胸の内を聞かせてくれた。

「じつは札幌に狸小路という商店街がありましてね。僕が15歳で札幌に出て来た時は一番の繁華街で憧れの街だったのに、駅前開発などで年追うごとに寂びれてしまって。帰る度にずっと心を痛めていたんです。そんな時、丸亀町の担当者からこの再開発は商店街を復活させる話だと聞いて、もし高松が成功すれば日本中の商店街も元気にできますかと聞いたら「できる!」と。だったらぜひ手伝わせて下さいと引き受けたんです。だからこのプロジェクトは何としても成功させたい。そのためには、まずは地元の人が地元の良さに気づくことですね。香川の食材を使っておいしさを再発見できるような料理を作りますので、楽しみにしてて下さい。きっと食べたらびっくりしますよ」

素材を活かす達人が高松という素材をどう料理するのか、自ずと期待は高まる。ぜひうどんを越える新たな「食」の感動を与えてほしい。

(敬称略・小西智都子)

三國 清三 〈Kiyomi Mikuni〉
1954年北海道生まれ。札幌グランドホテル、帝国ホテルで修行後、駐スイス日本大使館料理長、三ツ星レストランで修行を重ね、1985年に東京四ツ谷に「オテル・ドゥ・ミクニ」をオープンする。2000年には九州・沖縄サミット福岡蔵相会合の総料理長を担当。2003年、フランス共和国農事功労章シュバリエを受勲するなど、国際的にも高い評価を受けている。

●オテル・ドゥ・ミクニ
1985年、三國がオーナーシェフを務める店としてオープン。緑豊かな落ち着いた洋館にはサービス・料理ともに三國フレンチの神髄が詰っている。

●コートダジュール ミクニズ
南仏のリゾート地をイメージした店内では、相模湾であがった新鮮な魚貝類が楽しめる。特にハーブをふんだんに用いた南仏の地方料理はこの店のスペシャリテ。

●マダム ミクニ
オテル・ドゥ・ミクニに隣接するカフェ。四季折々のオリジナルケーキやデザートも楽しめる。テイクアウトも可能。

●ミクニ マンスール
四ツ谷の医療施設にある院内レストラン。「美しく、おいしく、心と体に優しい料理」を意味するマンスール食では、病院給食とフランス料理を融合させ新しい分野を拓いた。

左／弟子入りしたばかりの15歳の頃。「いつかは自分の店を」という志を胸に修行に励んでいた
中／丸亀町商店街の北の端にあった以前の丸亀町店。店頭はいつも唐芋きんの甘い匂いで満ちていた
右／全国の有名百貨店で人気の高い唐芋きんの実演販売。知名度抜群のローカルスイーツだ
下／夫婦で昔のアルバムを懐かしむ。「でも、写真撮る暇なんてなかったから、昔の店の写真はほとんどないなぁ」

SHOP takamatsu style の顔 01

松風庵 かねすえ

代表取締役社長

包末 招さん

Motomu Kanesue

昭和14年坂出市生まれの67歳。「食べて健康になる菓子づくり」が、和洋菓子店「松風庵かねすえ」のコンセプト。壱番街店では、ヘルシー志向の焼き菓子を中心に扱う。

15歳で菓子の世界に飛び込んだ。夫唱婦随から「婦唱夫随」に。

中学卒業と同時に15歳で菓子の世界に飛び込んだ。その動機は「坊さんなんてまっぴらごめん」。父親が寺の小僧に出そうとしたのでこりゃヤバイと駆け込んだのが、菓子屋に縁のあるところだった。それから50数年、菓子の世界で生きてきた。

その半生はまさに叩き上げ。失敗や挫折も多かったに違いないはずだが、「そんなんないわ。ワシの商売は松井の打率よりええ。ダハハハハ」と笑う。

相当な自信家と思いきや、「いえいえ、人に言えんつらい思いもいっぱいあった。泣いてる余裕がなかっただけ。それにこの人は前しか見てないから」と苦笑するのは妻の和子さん。「松風庵 かねすえ」の歴史は、苦楽を共にしてきた夫婦の絆の歴史でもある。

壱番街にオープンした新店舗。店先では、鳴門金時のきんつば「唐芋きん」の実演販売が行われ、その甘い匂いに誘われて、多くの買い物客が足を止める。丸亀町商店街は夫妻が出会った場所でもある。商店街の和洋菓子店に勤めていた時、親方の紹介で店の向かいの会社で働いていた和子さんと結婚。新婚早々、藤塚町に3坪足らずの店を借り、菓子屋を始めた。

といっても資金はなく、設備を整える余裕などない。商品は手持ちの炊飯器で作る桜餅とうぐいす餅だけ。当然、この店の売り上げだけで暮らせるはずもなく、しばらくは自分の店と勤めの二足のわらじ。深夜に勤めから戻った後、翌日の仕込みをし、早朝に作ってから出勤していた。

日中は妻が乳飲み子の世話をしながら、店を切り盛りしたが、「お菓子のことなんて、何も知らなかった」ため、右往左往の新婚時代だった。

そんな生活を2年ほど続けた後、現在、本店のある扇町に16坪の土地を買い、念願だった家と店を構えた。その頃のエピソードを尋ねると、「シュークリームやな」と2人で声を揃える。資金がないので中古のオーブンを買ったら穴が開いていた。土を詰め、穴をふさいで使ったものの、当然、うまく焼けるはずがない。来る日も来る日も表面真っ白、底は真っ黒なシュークリームしか作れなかった。

そんな様子を見かねたご近所さんが「小さい子どももおるのに、あんたらも困るやろ。私が全部買うてあげるわ」と失敗作のシュークリームを買ってくれた。「ワシらにとっては砂漠での一杯の水やった」。以来人生の節目節目で誰かが助けてくれた。

「自分の力なんて知れとる。周りが味方してくれたからここまで来れた。忘れたらいかん、絶対に」

一番の苦労はやはり資金繰り。寝る間を惜しんで働いても、金の苦労はいつもついてまわった。「ある年の正月、従業員に給料払うたら、甥や姪にやるお年玉さえなくなって、里帰りをあきらめたこともあった。ダハハハハ」。今でこそ笑い話だが、経理を預かる妻の気苦労は絶えなかった。

しかし、夫の経営センスを誰より信じていたのも和子さんだった。

「私に言う時は、もう自分で全て決めた後なんです。結婚した時からずっとそう。だから、私はわかりましたって言うしかない。そして、この人が決めたことだから、きっとなんとかなる、と思うしかないんです」

まさに夫唱婦随。ところが、4年前、夫婦関係を変える出来事が起こった。和子さんに胃がんの疑いが見つかる。半年前に身内を胃がんで亡くしたこともあり、大きなショックを受けた。そして、半生を振り返ったとき、切なさが込み上げてきた。

「私は自分勝手な夫を支えて今までがんばってきた。苦労ばかりで楽しいことなんて何一つなかった。私の人生はなんだったのか」。心の奥底にしまい込んでいた感情が一気に噴きだした。夫は初めて妻の本音に触れて驚いた。

幸いにもがんの疑いは誤診だった。この騒動を経て「家内のことは『隣のおばさん』と思うことにした」。

そのココロは、「家内なんて空気みたいなもんでわざわざ感謝なんてせん。でも、隣のおばさんなら、たまにはありがとうのひと言も言わんといかんやろ。ダハハハハ」。「あら？今でもありがとうなんて言わないでしょ」とすかさず返す和子さん。

しかし、最近では、「夫唱婦随」がときおり「婦唱夫随」になることも。これまでほとんどなかった夫婦旅行だが、今年は妻が押し切って北海道に出かけた。これからは夫婦水入らずの時間を持ちたいと和子さんは願う。「そうやな。たまにはワシがついていくのも悪くないかも。ダハハハハ」。その横で和子さんは「ムリムリ」と言わんばかりの顔をした。

（白井ひとみ）

photo：中村政秀

SHOP takamatsu style の顔 02

GINCHO and Fullhouse

店長
樫村宏治郎さん
koujirou Kashimura

昭和54年、高松市生まれ。トラッドを扱う店に生まれ育ったことと、祖父の経営手腕と職人気質、そのすべてをまっすぐに受け継ぐ27歳。

左／1970年代のGINCHOと丸亀町商店街。当時、靴屋「LOLO」はこの隣にあった
右／壱番街ができるまでは、仮店舗にて営業していた
下／樫村3兄弟　左：(有)百足屋の靴屋「LOLO」の店長、双子の弟、隆治さん(27歳)
中：樫村宏治郎さん(27歳)(GINCHO店長)　右：三男の照伸さん(23歳)

「オレが生まれ育った店は、絶対潰さない」
VANの石津謙介氏が、開店直後の銀蝶を訪れ、注目。

「いらっしゃいませ。このジャケット、昨年、当店で買われたものですね。そうそう、お探しの金ボタン、入荷していますよ。付け替えましょうか」

スーツからボタンなどの小物に至るまで、一人ひとりの好みが詳細にインプットされている。初めての客に対しても「例えば、顔立ちや気性、交わす言葉でその人となりを見て、その人に合ったファッションを提案するなど、できる限りのことをしたい」。

だが、「決して商品は押し付けません。置いているものはいいものばかりだから、気に入った方だけに買っていただきたいと思います」。

14歳で父を亡くした。「そういう事情もあって、中学時代から手に職をつけて、自分で飯を食っていくと決心していたんです」。

20歳の時、大阪の大学に通いながら宮大工になろうと薬師寺の修繕工事現場を訪ね、修行を積ませてくれる親方のもとに飛び込んだ。休む暇があれば、自ら進んでノミを磨ぐ日々。人指し指の爪と肉は何度も離れた。

それでも、道具を丁寧に磨き続けた。職人気質な一面を垣間見るエピソードである。

22歳のある日、母親から店にこれまでの賑わいがなくなっていることを告げられる。「町全体が不景気で、店に来ていただいていた従業員の方も、次々と辞めていった」。迷うことなく、大阪から高松へ飛んで帰った。

「店は自分が生まれ育ったところ。そこを、潰してはならない」。ただ、その思いだけで、店を継ごうと決意した。

店は小さいころ父親と遊びたくて、ずっと居た場所。でも、仕事をしている父親の後ろ姿をじっと見つめていただけだった。商品説明をじっと聞いていただけだった。その店を失うことは、自分の過去を失うことに等しかった。「よく考えると、自分が小さい時から、このテイストの服を着ていた」。22歳の彼は、こころに誓った。絶対、店を潰さないと。そして、自分は接客の職人になろうと決めた。ひとりで店を背負っていた母親の陽子さんは、「その決心に安堵や心強さを感じました」。

トラディショナル・ファッションが日本に伝わったのは、戦後間もなく。彼の祖父に当たる樫村安雄さんが、ヴァンヂャケット(VAN)の創設者、石津謙介さんと出会い、それが縁でVANを扱い始めたと振り返る。

安雄さんは、昭和初期から靴屋「百足屋」を営んでいた。当時、靴はオーダーメイド。注文を受けて、安雄さんがデザインをして、靴をこしらえていた。

戦争が終わっても、靴屋を続けていたものの、昭和30年頃から大量消費の波が押し寄せる。自分で作って売るスタイルからメーカーの靴を扱うスタイルに切り替えたと同時に、次はファッションの時代だと察知。

靴屋の「百足屋」(後に有限会社百足屋とし、靴屋の店名をLOLOとした)とは別に「おしゃれの店・銀蝶」(後に、GINCHOに変更)を立ち上げた。

そのほぼ直後、銀蝶に注目したのが石津謙介さんだったというから、当時の店はおしゃれの最先端だったのだろう。店を訪ねて来た石津さんの考え方に共感した安雄さんは、VANを中心商品にすえそれから約20年、樫村さんが産まれた時、店は多忙を極めていた。

両親は土日も関係なく常に店に居た。休みのない両親に遊んでもらいたい一心で、彼も店に居るようになった。しかし、両親は接客に忙しい。遊んでもらえないから仕方なく当時の店舗の2階にあった倉庫で、ひとり、トラッドの在庫の中で遊ぶ。

遊ぶといっても、それらを見ているだけで楽しかったと言う。服のカタチ、ディテール、在庫の有無など、意識しなくても自然と覚えた。店員さんが探している服でも、彼が在庫の場所を覚えていて、教えてあげるようなこともあったと言う。

そんな環境の中で、両親と祖父の接客の両方を見て育った。

「祖父は創業者ということもあって、結構、押しの強い接客をしていました。逆に、両親は『はんなり』としていました。両方のいいところを見てきたぼくは、その中間かな。そのあたりで接客の職人芸を目指しています」

さらに、「ぼくは好きだから、正統なトラッドを貫いています。いつもこのスタイルだし、これがぼくのファッションであり、生き方です。弟のように、カジュアルな崩し方もありだと思います。そのあたりの微妙な着こなしを提案できるのが、接客の職人じゃないかな」。

そう語った彼は、全身でアメリカン・トラッドを着こなしていた。

双子の弟、隆治さんは現在、靴屋「LOLO」の店長。三男の照伸さんは、サラリーマン。男三兄弟が力を合わせる日も、そう遠くはないはずだ。

(人見訓嘉)

約40年前のGINCHO。この店舗は創業の地・ライオン通りにあった

 photo:藤田幸裕

～新店からのメッセージ～

四国初出店の5店舗を含め、新しく壱番街にオープンした各店から推薦の1品を集めました。「大人のまち」にふさわしいこだわりの商品やサービスが勢揃いです。

EAST
ICHIBANGAI・東館

西館 2F　（カフェ）

パパス カフェ

TEL 087-811-3658

イチゴのタルト

ケーキはすべて店内の厨房で手作り。素材の味を活かすため、シンプルに旬のイチゴをたっぷり乗せました。全国で一番大きなパパスカフェとなる高松店では、結婚式の2次会など各種パーティも可能です。

西館 4F　（フランス料理）

ミクニ タカマツ

四国初出店

TEL 087-822-0392

「特集 RESTAURANT」6Pをご覧ください。

西館 3F　東館 3F　（書籍／DVD／CD）

紀伊國屋書店 高松店

TEL 087-811-6622

世界的建築家ケイニー・タン氏が手掛けた店内

店舗デザインは那須与一の弓矢がモチーフ。美術館のようにゆったりとした空間で本選びが楽しめます。紀伊國屋書店全店と繋がった独自検索システムで、店内にない本も最速で翌日にはお渡し可能に。宅配サービスもあります。

写真は同建築家による店舗（紀伊國屋書店大分店）

東館 1F　（スイーツ）

松風庵 かねすえ

TEL 087-811-0039

「SHOPの顔」8Pをご覧ください。

東館 1F　（レディス／服飾雑貨）

コレクション コニシ

TEL 087-821-7680

RGの「フラワー&ドールシリーズ」

商品開発時から携わって12年。ロングセラーのRGブランドは、バックや小物、帽子、靴、洋服など、作ったアイテムは数知れず。しかも毎回生産は小ロットなので、品切れになると入手不可能に。モチーフは花とドールの2種類です。

東館 2F　（インテリア／雑貨）

モアニ

TEL 087-816-1520

「LAMPE 023」のランプ

フランスのデザイナー、フランソワ・リゴーリ作のランプ。海からくみ上げた塩水で赤茶色にサビさせた上にコーティング。鉄の素材感が楽しめるだけでなく、曲げ加工はすべて手作業なので、2つと同じものはないそうです。

高松丸亀町壱番街

- 高松市丸亀町1番地1
- 代表電話：087-823-0001
- 営業時間：10:00～20:00
- 休　館　日：1月1日のみ
- 各店の詳細はホームページをご参照ください。
  高松丸亀町商店街振興組合 http://www.kame3.jp/

高松丸亀町壱番街駐車場（高松三越本館北側）

11月3日（金・祝）先行オープン

高松三越

ラグジュアリーブランドや四国初登場のブランドなど4ショップを先行オープンさせた高松三越。合わせて本館北側駐車場にも新たに2ショップがオープンしています。

ベーグル&ベーグル

四国初出店　（カフェ）

TEL 087-823-5339

スモークサーモン&クリームチーズ

常時15種ある焼きたてベーグルは、これまでのベーグルの概念を覆す“しっとり&もちもち”の食感が特長。中でも「スモークサーモン&クリームチーズ」は本場N.Y.の定番サンドです。この他、季節限定メニューもあります。

フルール ノブ

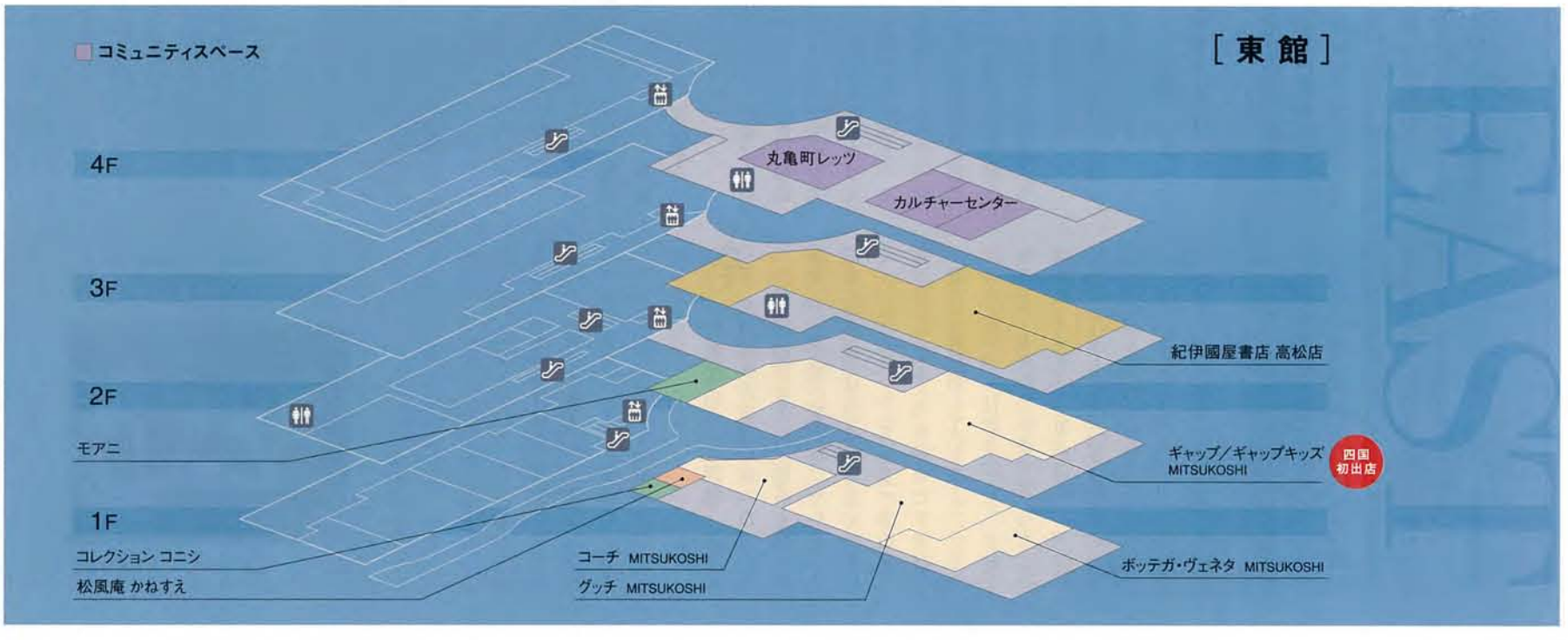
（フラワー）

TEL 087-821-8785

季節のプレゼントブーケ

旧高松三越別館1階から装いも新たにオープンし、花やサービスもますます充実。クリスマスやバレンタインなど大切な人へのプレゼントには、季節の花を使ってイメージに合ったブーケを。また普段使いにはお得なミニブーケもあります。

実際の商品とは異なる場合があります



WEST
ICHIBANGAI・西館

SHOP の顔 takamatsu style

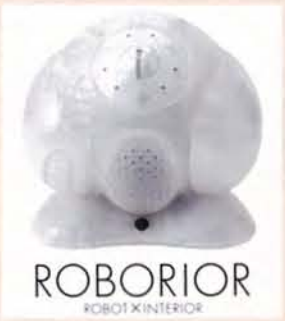
「1店1品紹介」

西館 1.2F （電化製品／ロボット）

野田屋電機
TEL 087-851-4545

ロボリア（お留守番ロボット）

ロボリアは、携帯電話（FOMA）による遠隔操作で、外出先からでもお子様やペット、要介護者等の様子を確認できる家庭用お留守番ロボット。野田屋電機では、電球1個から大型テレビまで「アスクル（明日来る）」ではなく「スグ」にお持ちします。



西館 1F （宝石／時計）

アイアイ イスズ ヴァンキャトル
TEL 087-822-5885

ブルガリ「ブルガリ ブルガリ」

時計の「ブルガリ ブルガリ」が2006年にモデルチェンジ、早くもベストセラーに。新しい文字盤にはクルー・ド・パリ装飾が施され、ブレスはサテンと鏡面仕上げ、よりスタイリッシュになりました。

西館 1F （メンズ／レディス）

ギンチョウ アンド フルハウス
TEL 087-851-6435
「SHOPの顔」9Pをご覧ください。

西館 1F （レディス／メンズ）

パパス マドモアゼルノンノン
TEL 087-811-3678（パパス）
087-811-3677（マドモアゼルノンノン）

大人のカジュアルを演出する革ジャケット

この秋冬のおすすめは、ヴィンテージ仕上げの革・カシミヤのジャケット。あらかじめよく水で洗い、素材の風合いと、初めて着た時から体によく馴染む柔らかさを出しました。それぞれ選び抜いた素材ならではのしっかりとした温かさです。

西館 1F （レディス／服飾雑貨）

マックスマーラ
TEL 087-821-6300

西館 1F （レディス）

ヨーガンレール
TEL 087-821-7064

天然素材のコートやジャケット

天然素材の持ち味を生かした商品は、独自の色使いや着心地の良さに定評あり。秋冬のおすすめはシルクとウールの刺し子のコートや、アンゴラシープのジャケットなど。天然石やゴールドを使ったジュエリーも豊富です。

西館 2F （スイーツ／カフェ）

デザートディッシュ
TEL 087-821-3735

今話題の黒酢やりんご酢を、天然水や野菜・フルーツジュースと組み合わせた健康ドリンクは「M Style Café」のおすすめメニュー。たい焼の「TAIHIME」、洋菓子の「プリンセスストーリー」と合わせてテイクアウトしたら2階テラスでひと息できます。

西館 2F （インテリア／生活雑貨）

オフノオン
四国初出店
TEL 087-823-5224

Twinkle Christmas Tree

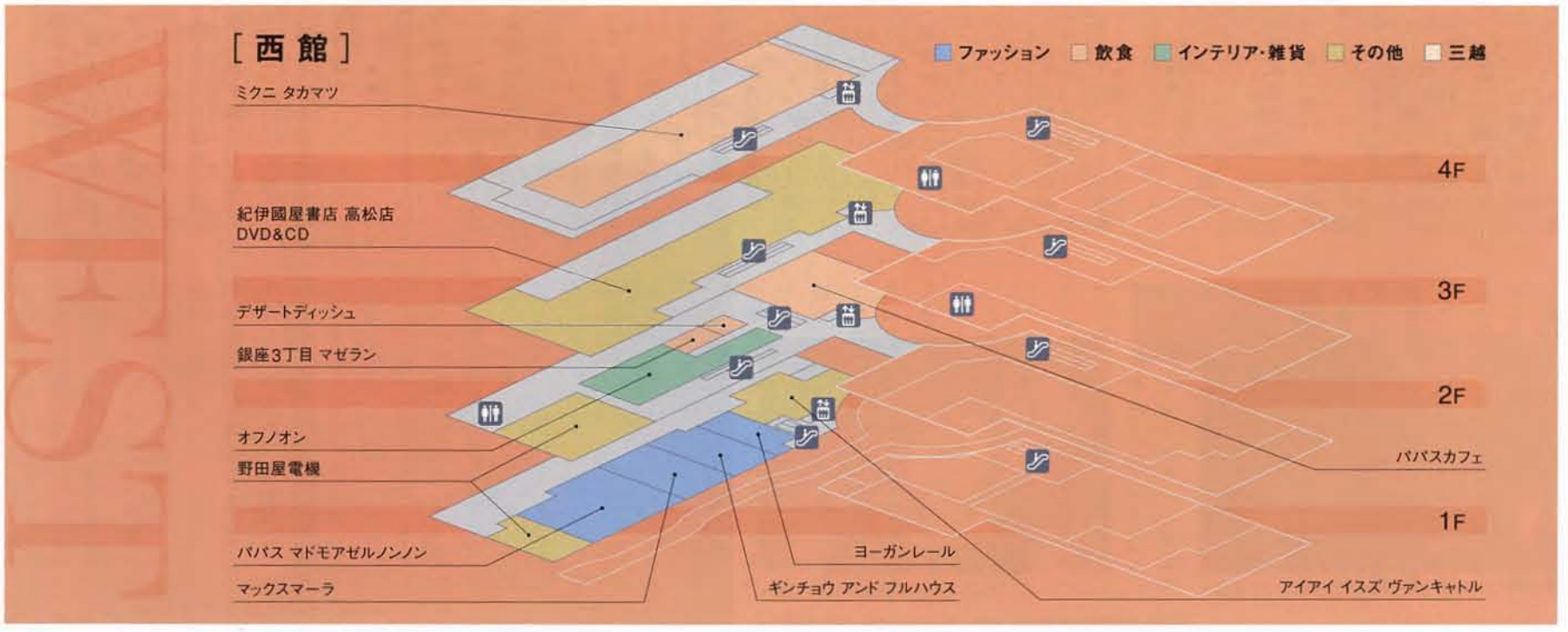
ホワイトクリスマスをイメージしたブルー＆シルバーのツリーは大人のインテリアに。星の瞬きをかたどったモチーフのラメが華やかさを演出します。高さは右40cm、左30cm。

西館 2F （チーズケーキ）

銀座3丁目 マゼラン
四国初出店
TEL 087-823-5681

焼きたてプレーンチーズケーキ

看板商品のチーズケーキはすべて店頭で作っているのでいつでも出来たて。旬の食材を使った季節限定商品として、12月はマロンチーズケーキとチョコレートチーズケーキも登場します。



ドーム広場を演出する
川島 猛
NYに住みつき40年

喜寿間近の現在も、モダンアートの第一線で活躍する川島 猛。本拠地米国ニューヨーク・ソーホーと、地元高松市塩江町のアトリエで、精力的に制作活動を続けている。新しく生まれ変わる高松丸亀町商店街のシンボル、ガレリアドーム広場。そのアーティストとして制作に追われる現場を訪ねた。

独特の曲線を描くパターンを切り出し、ドーム広場の構想を練る――塩江町のアトリエで　photo:藤田幸裕

高松市出身の現代美術アーティスト、川島 猛。人々が行き交うドーム広場を、その力強く個性的なモチーフが彩る。建物の手すりには、曲線が踊るような独特の形をした金属板装飾が施され、街のベンチも楽しげなデザインに変わる。街全体が、楽しく華やかな雰囲気に包まれる予定だ。

●●

川島 猛が渡米した1960年代は、芸術、美術の中心がパリからニューヨークへ移り、世界的に現代美術が隆盛した時代だった。

「僕がアメリカに渡ったのが1963年、もう43年前になる。当時の日本の若い現代美術作家は、ニューヨークへの関心が非常に強かった。でもそのころは情報が少なく、美術専門雑誌の情報ぐらいしかなかった。僕自身も憧れのアメリカに対して、ちゃんとした計画や具体的な目標もなく、ただただニューヨークに行きたい一心だった。できたら、『影響を受ける』ところから『影響を与える』ところに身を置いて、その場の臨場感を感じながら学びたかった。一度、渡米にトライして挫折していたので、再度のチャンスを待っていた事もあり、さあー、行くぞ！の気概だったよ」

●●

当時のニューヨークには、数多くの日本人アーティストがいた。香川県出身の画家猪熊弦一郎の他、池田満寿夫、荒川修作、篠原有司男、草間彌生、アイ・オー、川原 温など才気溢れる若者たちがいた。

「ニューヨークに来て驚いたのは、芸術、美術に対する一般人の関心が高く、専門知識も豊富に持っていたこと。芸術、美術が生活の中に溶け込んでいた。画廊や美術館といえば、どこもデパートのように多くの入場者で賑わい、デートも食事も美術館でというほど一般的に身近で、地域社会と縁の切れない場だった。小学校低学年の子どもたちが、先生に連れられて美術館のピカソの絵の前であぐらをかき、真面目に発言しているのによく出くわしたなあ」

ニューヨークでも塩江でも、アートへの姿勢は変わらない。夜中まで制作が続く事も度々だ。食事中もアイデアが閃くと、すぐにスケッチする。アトリエには来客も多い。制作と同じように、友人や訪問者とはとことん付合うのが川島流。酒が大好きなので、徹底的に酒を飲み交わす。

「自分がニューヨークに定住できたのも、所持金100ドルで1、2ヶ月生活することから始め、なんとか今まで続けられているのも、友人たちの助けがあったからこそです」と恥ずかしそうに語る。

●●

1960年代のニューヨークは、アクションペインティングのウイレム・デ・クーニングが健在。モダンアートの次の世代、ジャスパー・ジョーンズやロバート・ローシェンバーグ、そしてポップアートではロイ・リヒテンシュタイン、アンディ・ウォーホル、クラエス・オルデンバーグなどがトップスターだった。

「グッゲンハイム美術館で、米国作家のモーリス・ルイスや英国作家のフランシス・ベーコンの回顧展を見て、素晴らしさに本当に驚いた。2人の名前も作品も全く知らなかったが。この地には、あらゆる表現、創造の素晴らしさが満ち溢れていた。そして様々な国籍

川島 猛〈Takeshi Kawashima〉

1930年香川県高松市生まれ。香川県立高松工芸高校卒業後、上京。武蔵野美術学校（現武蔵野美術大学油絵科）を中退し1963年渡米。アート・スチューデント・リーグ在学（1964-67）、Daniel Schnakenberg及びBoard of Controlスカラシップを受ける。1966年ニューヨーク近代美術館の展覧会で高く評価され、現在まで、ソーホーのアトリエを拠点に制作活動を続けている。アメリカではニューヨーク近代美術館（永久保存作品）、クライスラー美術館、ポツダム州立大学など、日本国内では国立近代美術館（京都、東京）、東京都立美術館、大原美術館、広島市現代美術館、富山県立近代美術館などに作品が収蔵されている。個展、コミッションワーク多数。近年はキャンバス上で木や金属素材を使ったり、石や金属の彫刻を制作するなど、新しい表現を追求し続けている。2007年にパリのSerge Panijel画廊、ミウラート・ヴィレッジ・ミュージアム（愛媛県松山市）で個展が開かれる。 http://www.dpoweb.com/~kawashima/index.shtml

の作家たちが存在し、活躍している。アメリカという国の底知れない深さ、広さ、多様性と多面性を感じた。それは限り無く続く、地球の断層のようだったなあ」

夢とエネルギーに満ち、創作意欲を刺激するニューヨークの日々。数多くの友人たちとの交流を続けながら、新しい表現に没頭した。

• •

「丸亀町は、僕が若いころから一番の中心地だった。宮武画廊の小西百々代さんや商店街の人たち（特に奥さんたち）が、アートや工芸をめざす若者を助け励ましてくれた。今回はその恩返し」と語る。

「昔の丸亀町商店街は、若い僕らにとって『憧れの街』だった。そのころの丸亀町周辺は、商店建築やインテリアデザインでは全国的にも有名な街。碓井 登さんや寒川 登さんが設計した店舗は、全国から専門家が見に来るほどだった。桜製作所の高松顕さんと永見眞一さんが手掛けた家具や店舗も素晴らしかった。店先に有名画家の絵が飾ってあったり、包装紙には女流書道家 篠原桃紅の書が使われていたり。百間町の料亭二蝶には日本政財界のトップがよく出入りしていた。彫刻家の流さん（流 政之）もいたなあ。僕らには近寄れないほどの雰囲気があった。大げさに言えば、理解者がいるからアートの街になる」。川島 猛の記憶に残る丸亀町は、「アート」と「最先端」がある街だった。

• •

街に対する基本的な考え方は、ニューヨークでの生活が教えてくれた。「郷里から離れて暮らしているから、僕は街をグローバルに見ることができる。道路でも建物でも話題になるいいものを作れば、後に多少お金がかかっても、色んなPR効果と波及効果で投資は回収される。僕のアトリエがあるソーホーも、発想豊かな一つの作品が持つ力（インパクト）が評判になり、人が見にくるようになった。アーティストや画廊が多数集まった、あのわずかな地域に観光客が落とすお金は、確実にニューヨークの力になっているよ」

• •

「僕は外にいる人間だから、高松に対して古里や郷里の意識が強い。マイホーム、マイシティー、回帰本能というのかな、そんな気持ちがある」と、今回の関わりをそんな言葉で表現した。口癖は、「もの作りは、ベターよりベストを！」。「様々な事情による厳しい制約も、全然苦にならない。勉強のためにやっている。楽しくて仕方ない。それに制約があった方が、勉強になる」と事も無げに言う。その表情は作品のように、すっきり爽やかで若々しい。「できる可能性があるから、新しい丸亀町がインターナショナルで、モデルシティー、モデルストリート、モデルショップになり、全てのサンプルが揃う街になってほしい」と心から願う。

「人生もアートと同じで、コンティニュー（続けていくこと）が大事！」。アンディ・ウォーホルやロイ・リヒテンシュタインなどと同時代を生きたアーティストの好きな言葉だ。（敬称略）

31 N
FRIDAY, APRIL 21, 2006

WEEKEND Arts FINE ARTS LEISURE

The New York Times

ART REVIEW

Experience Matters: Creators in Midcareer and Beyond

By HOLLAND COTTER

"DON'T trust anyone over 30" was the street wisdom I grew up with.

I still find that excellent advice. But my faith in youthful inspiration has been tested recently; by art, of all things, or rather by the art world's fixation on barely-out-of-school talent.

Not that my interest in new art has in any way diminished. It hasn't. Still, these days I find my attention drawn to the not-so-new, to artists who are in midcareer and beyond, sometimes far beyond. Many such artists are in evidence in galleries and museums this month, and I'll mention a handful below, among them a posthumous hero, a poet-turned-artist, an octogenarian debutante. They have one thing in common: their work has developed over time and maintained its presence for a number of years. In a fast-food culture, as capricious in its erasures as in its rewards, that's the vote of confidence that counts.

Midcareer is a flexible category, defined partly by age, partly by time on the job. **Sherrie Levine**, a New York-based Conceptual artist who has a fine show at Paula Cooper Gallery, qualifies on both counts. Now just shy of 60, she had her first gallery solo in 1974, and came into her own in the 1980's with the wave of East Village "appropriation art," work that lifted images from art history and popular culture to comment on history and culture themselves.

Ms. Levine's initial borrowings

From top, Gavin Brown's Enterprise and Washburn Gallery

ove, from top, Thomas yrle's "Orson Welles een" (1971), silkscreen on per; and Jack Younger-

Mitchell Algus Gallery

Takeshi Kawashima's "Red and Black" (1966). Mr. Kawashima's work meets the growing international affinity for pop-influenced Japanese art.

Mitchell Algus Gallery continues its invaluable rescue of overlooked careers with a sampling of work by the Japanese-born, New York-based **Takeshi Kawashima**. The show isn't large, but it's extensive. It encompasses both Mr. Kawashima's eye-jolting red-and-black paintings from the 1960's and his recent, candy-colored "Kaleidoscope." Both look good, and both are right in line with current trends in a Japanese pop art that has become a global favorite.

Contemporary African art is also gaining

2006年4月21日のニューヨークタイムズに、1966年作"赤と黒"が紹介された

▲塩江を訪れた故池田満寿夫さん

▲緑豊かな温泉郷にある、高松市塩江町のアトリエ

◀代表作"赤と黒"の前で、鋭い眼光が印象的な36歳の川島 猛。
格子で仕切られた正方形の中に有機的な形態を閉じ込めた、家紋のような抽象画シリーズ

30年後、変貌した丸亀町を訪ねた

ガラス越しに陽光が差し込むドーム下広場から、子どもたちの歓声が聞こえて来た。

西暦2036年。ここは、道州制施行で四国州となった全四国の州都、高松市。その州都にふさわしい発展を遂げたのが中心市街地、丸亀町商店街である。30年間も高松を離れていた私は故郷に帰って来た。途切れることのない人通りと賑わいを取り戻した街の変貌に驚きながら興味深く歩いている。

「あら、随分、久しぶりやの…いつ、帰って来たん?」。振り向くと白髪の老人が声をかけて来た。

「街の様子が随分変わりましたね?」。老人は、ひと呼吸おいて、「そうやの…壱番街ビルのオープンから、ちょうど30年。時間はかかったけど、一通り5階以上に建替えも済んだの。来年は、壱番街に再投資して、リニューアル工事に入る予定なんじゃよ。常に来街者を感動させるのが、商店街まちづくりの使命やからの…」。

眼光の衰えない老人は、矢継ぎ早に、丸亀町のまちづくりについて語ってくれた。

壱番街の外観イメージ図

生まれ変わったショッピングストリート

2006年にオープンした壱番街ビルに引き続き、B街区、C街区へと、建替えの動きは加速。その後10年間で、500mの商店街は、調和のとれた建築が連なり、一体感を持ったショッピングストリートへ変貌した。

「壱番街では苦労したけど…オープン後、多くの人で賑わったからの。街中の再開発に対する地権者の理解が深まったんじゃ。また市民のますますの期待に応えて、開発や投資のスピードが早まったんだろうな。大きな石が転がり出し、街が動き出したんじゃよ」

タウンマネジメントプログラムという、まちづくりの長期的な戦略に基づいて、旧商店街を変貌させたのである。デザインコード、まちづくりのルール(地区計画)、開発資金(ファンド)の調達、住民と専門家とともに知恵を絞ってつくり出したまちづくりの手法である。いまや全国各地の商店街がこぞって、真似をしている。

老人は、力強く言う「一度に街を変えることはできんからな…。時間はかかったが、具体的なビジョンや将来設計図をみんなが共有できたから、ここまでまちづくりが進んだんじゃよ」。

100年の計にたち、まちづくりの戦略の重要性を訴えた先人がいたからこそ、市民に支持されるショッピングストリートへと再生したのである。私は建て替わったストリートの建物の姿を見ながら、深くうなずいた。"信念を持ち続けた人々の知恵が、街を変えたのである"と。

安気な老人、若夫婦——多様な人が住み、集う

ベビーカーを押すおしゃれな女性、フランスパンを脇に抱えるカップル。カフェで過ごす老夫婦。ここには、暮らしの匂いを感じる。

すると前から歩いてくる女性が声をかけて来た。

「お久しぶりです。覚えてますか?今、この街に住んでるんですよ。高齢な母の介護もあり、便利な中心部に住み変えたの」

今、丸亀町界隈の人口は、800人。この30年で、10倍に増えた。都心居住が市民に定着し、若年層から高齢者単身の世帯まで多様な世代が暮らす。各科の診療所をはじめ看護・介護ステーション、デイサービスセンターなど高齢者への手厚い支援システムを備えたマンションも増えてきた。

「わしも、夫婦2人で、この上のマンションの6階に住んどる。商店街に日用品や食料品を扱う店も増えたの。野菜や魚は、水神市場で新鮮なものが毎朝、手に入るしな。幸い、まだ元気で医者いらずだが、もしもの時もこの街なら安心じゃ。何と言っても、人が優しいからな…」

街に暮らす人が増えることで、それに伴う新たなサービスや施設が増えて来たのだ。多様な世代間の交流が、人情を育み、人に優しい街に成長させた。街が動き出したことで、人の心も動き出した。

「何より人が幸せな気持ちになることが、まちづくりなんじゃよ。わしも今、まわりの人に助けられながら、安気に暮らしとるよ」と語る老人の目元は優しかった。

欲しいものが手に入る洗練された店舗の数々

今もファッショナブルな女性が、私の前を横切った。州都・高松のファッション・流行の発信地として、訪れる人の感性を刺激しているそうだ。「高松スタイル」とメディアでは呼ぶ。華やかなウインドウの演出がファッションの街であることを印象づける。

「もう、神戸や東京に出かけなくても、最新のモードが手に入るのよ」と呟く彼女の隣で娘が美しく輝く。

「昔は、欲しいものが手に入らない店ばかりで、陳腐な商品を平気で並

べていたものよ。先月、有名ブランドが限定発売した後藤塗りで装飾した竹製のバッグは、2時間で完売なの。これを作った地元の工房の製品は、世界各地の有名店で取り扱われているそうよ。限定品は、ここでしか買えないのよ…東京の友達から頼まれるけど、最近は地元でも買えなくて…」と悔しそうな表情を浮かべる彼女の横顔に、何となく優越感が交じる。

女性が美しい街は、品格が漂うのである。

この街の魅力は、感動ともてなし

とにかく、店員の笑顔が気持ちいい。よく教育された接客スタッフの軽やかな身のこなしが、ホテルのコンシェルジュと重なる。

洋食屋で昼食をとっていると、「これ、サービスだよ。美味しいよ」。店主からカウンター越しに一皿さし出された。開店30年の記念日だという。

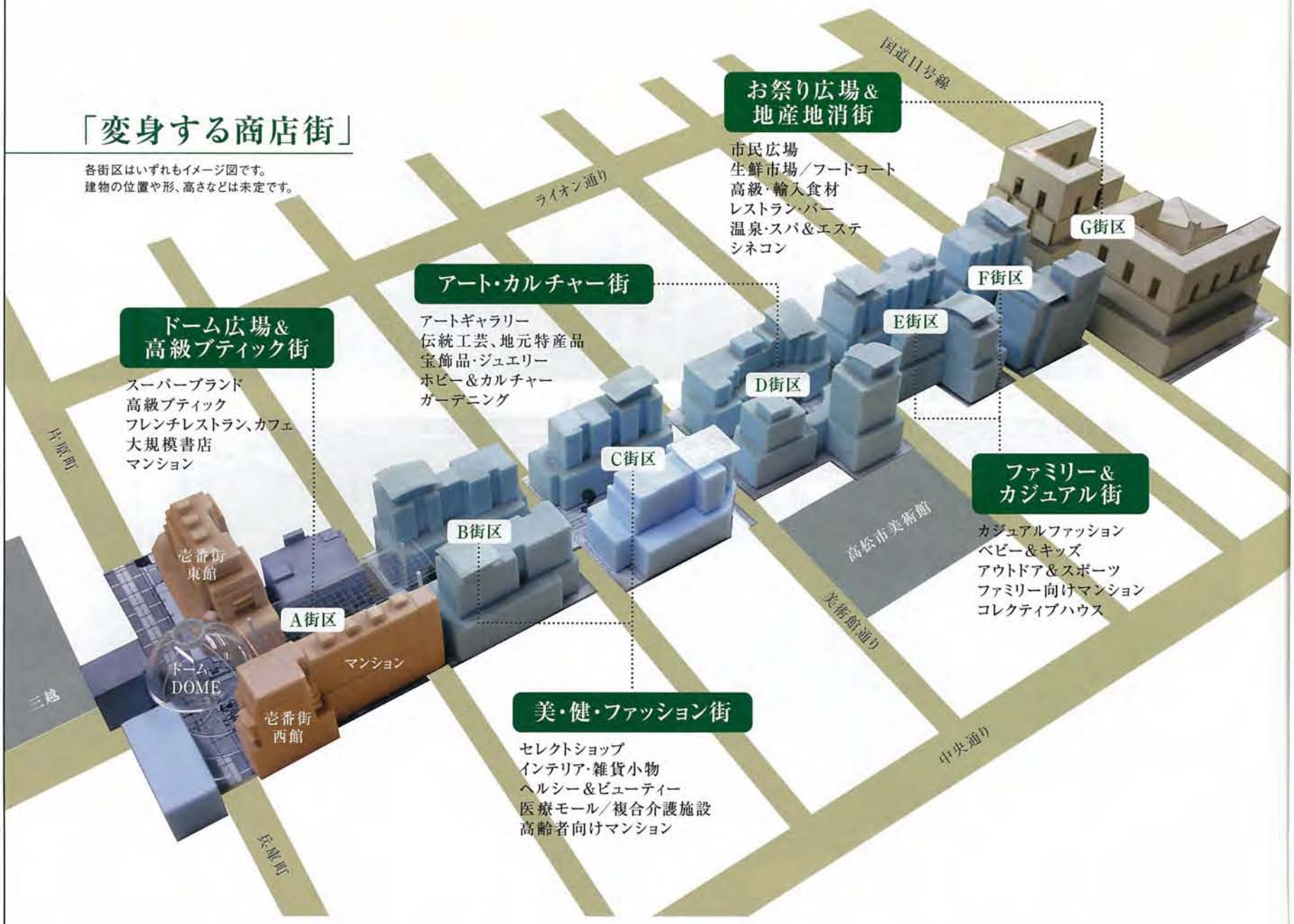
「うちのお客さんは、週末になると、遠方からわざわざ来てくれる人ばかり。ありがたいことじゃ。開店して30年になるが、ファンが育ててくれたお陰で、味は当時のままじゃ」

「この街には、いろいろお店があるが、サービスでは、どこも引けを取らんの…まちづくり会社で、定期的に教育研修を受けないといかんし、徹底した顧客サービスに街ぐるみで、取り組んでいるんじゃよ。笑顔の練習は、いまでも苦手じゃがな…」

自然な笑顔の裏に、組織的な教育や訓練があるとは気がつかなかった。話を聞き終わって、もう一度、感動したのである。ご主人の精一杯のもてなしに、心も満腹なひとときであった。

「変身する商店街」

各街区はいずれもイメージ図です。
建物の位置や形、高さなどは未定です。



住民自身で街の運営や管理を担う、まちづくり会社

別れの挨拶に出向くために、老人の行きつけの水神温泉を覗いた。

「わしに言わせれば、まだまだだな、ビルも建て替わり、テナントも入れ替わり、器も人も商品も新しくなったんじゃが、これは先人の手柄。街は生きているし、お客のニーズに耳を傾ける努力を怠ったら、すぐ街は荒廃する。上手くいっている時こそ、次の手を打つこと。まちづくり会社が上手く機能しているから、みんな安心して商売を続けられるんじゃ」

住民自身で運営するまちづくり会社は、まちづくりの企画、資金の調達、所有する不動産ビルの管理、テナントの誘致や入替え、イベントからプロモーションに至るまちづくりの実務を担う。お店の売上げが増え、固定資産の価値が向上し、税収が伸びることで評価される。

まちづくり会社は、最近、農園やものづくり職業訓練学校の経営、介護サービス事業、アート・芸能・文化事業などに参入し、不動産収入に頼らない経営基盤の確立を目指している。

「まちづくり会社を中心に、市民全員が人々の幸せづくりのために、協働していくのが夢じゃの。これが住民自治というものだ。州都になった高松の中心市街地に住む人、商売をする人、訪れる人の幸せを追求するために、まちづくり会社の仕事は山ほどあるぞ。今度は、都市が大きく動き出す気配がするの…」

私は、帰路の途中、瀬戸の夕日を見ながら考えた。「明日、まちづくり会社を訪ね、手伝えることがあるか聞いてみよう」。

（廣瀬将人）

さぬきの歴史を探る【I】

壱番街で江戸の大井戸発見

壱番街のオープンで沸くA街区。
すべてが真新しく、
スタイリッシュな空間の一角で、
実は江戸時代の井戸が発見されていた。
その大きさは高松城跡では最大規模。
その歴史をたどると、
丸亀町のなりたちと縁がある井戸であった。

その井戸が発見されたのは2006年4月のこと。A街区再開発工事に伴い、高松市教育委員会が行った埋蔵文化財発掘調査により見つかった。場所は高松三越の北側、新たに立体駐車場が建設された一角だ。井戸といっても、地中から汲み上げる小さなものではない。東西約3.8m、南北約5.9mの長方形で、深さは約1.6mと小型のプールのよう。高松城跡で確認されている井戸の中では最大規模である。花崗岩の割石の石垣で囲まれ、その隙間からは水が湧き出し、深さ50cm以上もの水が溜まっていた。井戸の南側には玉砂利が敷かれ、井戸へと降りやすいよう階段が設けられていた。

■生駒氏と丸亀町

時代を特定する手がかりは、石垣に使われた割石のひとつにあった。北西隅に据え置かれていた石に施されていたのは扇型の刻印。これは生駒家の家紋、「波切車」である。生駒家は、高松城と城下町を築いた大名で、天正15年(1587年)、豊臣秀吉の家臣であった生駒親正が入封し、その後四代にわたって讃岐の地を治めた。外堀、中堀、内堀の三重の堀を構えた高松城は、「讃州さぬきは高松様の城が見えます波の上」と謡われているように日本三大水城のひとつとして知られている。

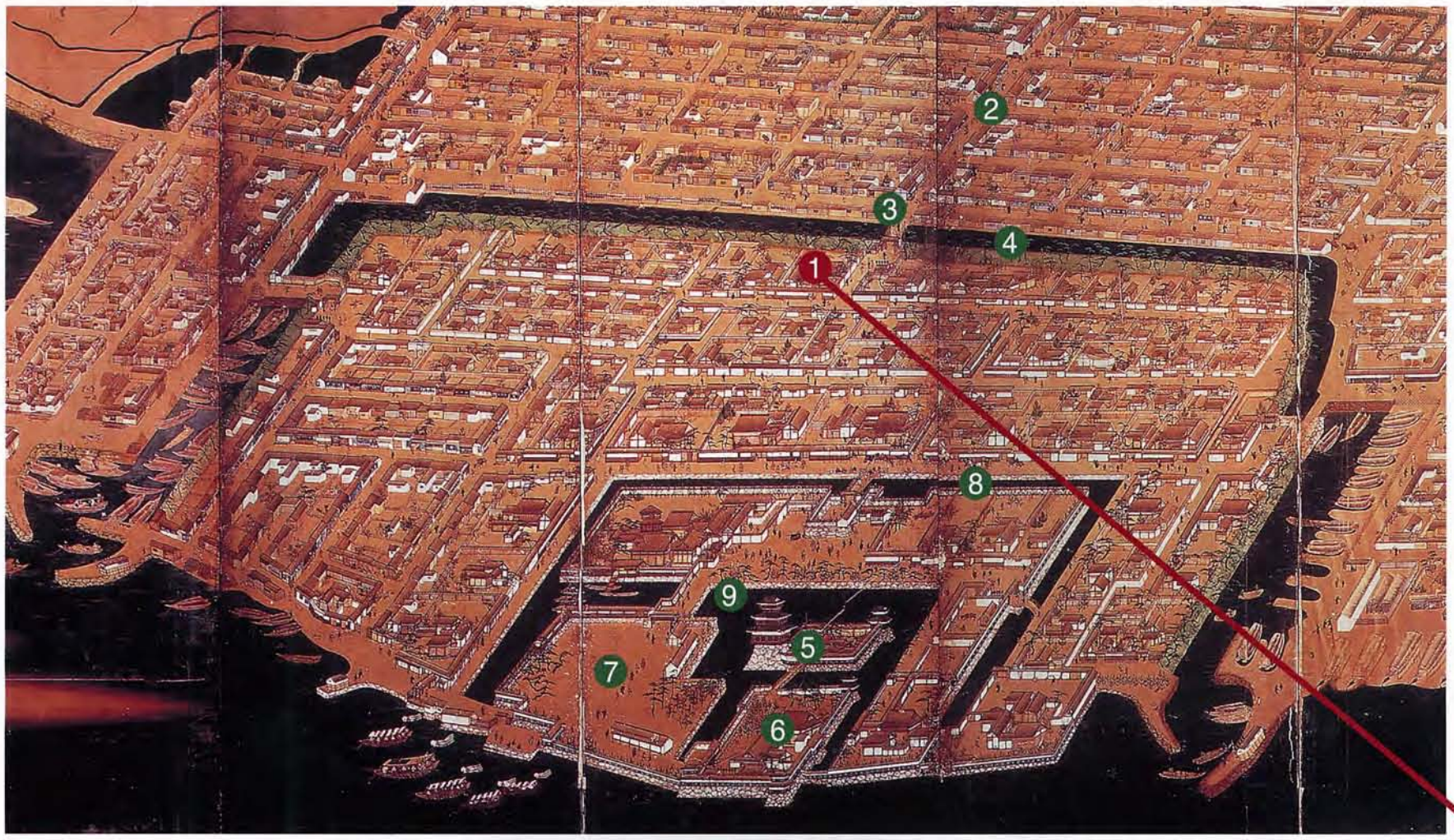
生駒の家紋が入った刻印石、同時に出土した陶磁器や瓦などから、この井戸が使用されていたのは、江戸時代初期と推定された。丸亀町が形成されたのもちょうどそのころ。丸亀町の名は、慶長15年(1610年)、三代生駒正俊が家督を継ぎ、丸亀城から高松城に入った際、丸亀の商人を移住させたことによる。外堀にかかる常盤橋をはさんですぐ近くの井戸と丸亀町は、共に生駒家がもたらした。

井戸がどのように使われていたのかは、はっきりしない。生駒時代の文献や資料が限られているためだ。しかし、武家屋敷地に設けられている点から、その屋敷での生活用水や有事の際の防火用水の役割を果たしていたのではないかと推測されている。

また、生駒家の後、高松藩主となった松平頼重は、地中に水路を造り、地下水を水源とした上水道を整備した。井戸と上水道の関連も考えられる。

ここで素朴な疑問がひとつ。井戸があったのは海水を引き込んだ外堀と中堀の間。果たして井戸水は真水だったのか?それとも海水?そんな疑問に答えるべく、発掘に関わっ

A. 発掘時の大型井戸の様子／発掘された井戸は、東西約3.8m、南北約5.9m、深さは約1.6mと大型。底には水が溜まっていた
B. 刻印石／井戸の一角に据え置かれていた「刻印石」。左下の扇型の刻印が生駒家の家紋を表す「波切車」。右上の○に十字は井戸屋か石屋を表す印
C. 生駒家の家紋「波切車」／「矢島町と生駒氏」(高松市歴史資料館発行)掲載の「藩主所用波引車紋陣羽織(龍源寺蔵)」より紹介
D. 軒丸瓦／井戸とともに出土した軒丸瓦。杵を交差させた紋様は高松城跡では珍しいもの
E. 「松田庄九郎」木簡(荷札)／発掘調査で出土した木簡。発掘場所は、江戸初期の絵地図によると、松田庄九郎の兄、松田庄左衛門の屋敷があった。この木簡の出土により、絵地図どおり武家屋敷地であったことが判明した



▲高松城下図屏風（香川県歴史博物館蔵）／高松城は、海水を引き込んで外堀、中堀、内堀の三重の堀をめぐらした水城。井戸があったのは、城の南側、武家屋敷が立ち並んでいた場所で、南大手門を抜ければ丸亀町へと続く

た勇気ある調査員が発掘時に湧き出ていた水を飲んだ。所感は「ちょっぴり塩分を感じるものの飲める水」。念の為、高松市水道局で調べたところ、「塩分は水道水の倍くらい」というデータを得た。実は、井戸の下には中世に埋没した川の跡があった。井戸の水は豊富な伏流水を利用していたもので、現在もその水が湧いていたようだ。

■丸亀町ダ・ヴィンチ・コード？

発掘調査を終え、井戸の撤去が進められていたころ、高松丸亀町商店街振興組合に地元の郷土史愛好家から一枚の絵地図が持ちこまれた。江戸末期の高松城下を描いた「弘化年間高松城下絵図」で、井戸のあった場所には「御厩 馬場」の記載があり、後年、馬場として利用されていたことがわかる。注目すべきは、その横に小さく書かれていた文字。そこには「血屋敷井戸趾」とあった。また、井戸の刻印石には、生駒家の家紋の他、十字架に見えなくもない○（マル）に十字の紋様も刻まれていたことがわかった。「血屋敷」というおどろおどろしい言葉と関連付け、「かつて隠れキリシタンが弾圧された場所では？」という大胆な仮説を口にする人もいた。

では、事実はどうなのか？発掘調査にあたった高松市教育委員会文化振興課の小川賢（たかし）さんに聞いた。「刻印石の十字の紋様ですが、明らかに十字架ではありません。井戸を造った井戸屋、もしくは石屋が彫ったもの、つまり、生駒家が施主で、十字の紋様は施工主を表しています」。

続いて「血屋敷」が意味するものは？と水を向けると、「こちらの方は今のところ手がかりがありません。新たな資料の発見を期待しています」とのこと。しかし、井戸がなくなった後も絵地図に「井戸趾」と記されているのを見ると、この井戸がいかに市井の人々の記憶に残っていたかがわかる。

この井戸は、一旦、石組みが撤去されたが、その石は今も大切に保管されている。同組合には、生駒時代の数少ない貴重な遺跡として復元を望む声も寄せられ、時機を見て復元できればという思いはあるそうだが、さまざまな手続きや費用面での課題もある。近い将来、生駒家ゆかりの大井戸を再び目にできることに期待したい。

（白井ひとみ）

弘化年間高松城下絵図（香川県歴史博物館蔵）／江戸末期の絵地図によれば、井戸のあった場所には「御厩 馬場」の記載とともに「血屋敷井戸趾」と記されている

商店街が開店する頃、こうしてゆっくりゆっくり自転車をこぎながらやってくる。
水・日曜日は市場が休みなのでいただきさんもお休み

いただきさん

街中に磯の香を届ける朝の顔

「おはようさん、今日は早いでないんな」

「ええカニ入っとるで。けど気に入ってくれたら買うてくれたらえんぜ」

「今晩は茶わん蒸しするからアナゴちょうだい。孫が帰って来るんよ」

ガタゴトとリヤカー付き自転車で、毎朝、魚を売りにやってくる「いただきさん」。雨の日も風の日も、商店街の片隅からは、こんな常連客との気の置けない会話が聞こえてくる。

いただきさんとは、市場で上がった魚を行商して回る女性たちのこと。港町・高松の朝の名物だ。古くは屋島の合戦で惨敗した平家の落人の娘「いとより姫」が家来を助けるため、捕った魚をハンボ(桶)に入れて頭に"いただき"、街で売り歩いたのが始まりと言われている。現在は、漁師の妻や娘たちが夫らが捕ってきた海幸をそのまま街中へ届けてくれる。ウリは何と言っても魚の活きの良さ。大正時代までは桶を頭に乗せて行商する姿も見られたが、その後は手押し車からリヤカー付き自転車へと進化。かつては400人近くいたが、現在は20~30人にまで減っている。

市場に集合、朝6時

いただきさんの朝は早い。卸売り市場で魚を仕入れると、市場の

市場では、長年の目利きが勝負。男たちに混じりながら次々と新鮮な魚貝を仕入れていく

いただきさん

脇で手早く魚をさばき、準備が終わると8時過ぎにはリヤカーをこぎこぎ街中へ繰り出していく。小倉美佐子さん(75歳)はこの道55年の大ベテラン。いつもの場所でリヤカーを停めると、自然と人の輪ができる。この日は、ゲタ、アナゴ、イカ、タコ、アジ、サンマ、サワラ、ハマチ、貝柱…と、地の魚を中心に約15種類が並んだ。どれもまだピチピチ。お目当ての魚が決まると、客の注文に応じて、切り身にしたり刺身にしたり、好きな分だけ食べやすく切ってくれる。切っている間も焼くのがいいか、三杯酢がいいか、一番おいしい食べ方のレクチャー付きだ。こうしてお昼を過ぎるころにはほとんど完売。「はい、行ってらっしゃい!」と今日も気持ちのいい声で客たちを送りだした。

心に刻まれた瀬戸の味

高松人の「魚食い」は、街中だけではない。

北浜町にある特別養護老人ホーム「玉藻荘」には、毎週木曜日の朝、いただきさんがやって来る。栄養士が食材を選ぶ横で、入居者のお年寄りたちも楽しそうに魚を物色、時には食べたい魚をリクエストすることもある。こうした施設で既存のルート以外から食材を購入するのは極めて異例だが、発案者の野口尚義園長は、入居者にこれまで通りの"日常の暮らし"を施設でも送ってほしいと熱く語る。

「ここの入居者はほとんどがこの地域の方で、ずっといただきさんの魚を食べて暮らしてきた人たちです。戦後の食糧難の時には、魚は何よりのご馳走でした。しかも今ほど流通が発達していませんから、鮮魚を食べられるのは市内でも海が近いこの辺りの特権だったんですね。だからみんな魚の味を良く知っています。そんな人たちが、施設に来たら切り身やすり潰して何の魚かわからないものばかりでは淋しいでしょう」

その言葉通り入居者にも好評で、真砂君江さん(86歳)は「昔自分がやっていたように、薄味で塩焼きや煮付けにするのが一番ね」と魚の話になると笑顔がこぼれる。また「食べればわかる!」と語るのは岡観隆さん(78歳)、中央町生まれの街中育ちだ。

「子どものころ、東京から来客があるからといただきさんに魚を頼んだら、大きな金たらいに水を張り、魚を生きたまま持って来てその場で刺身にしてくれたこともありました。また都会にいる息子は、昔は目もくれなかったのに、今は帰ってくる度においしいと言って必ず地の魚を食べて帰ります。その土地で捕れたものをおいしくいただく。これはお金では買えない贅沢ですよ」

普段当たり前のように見過ごしているいただきさんの朝の光景。そんな何気ない日常の暮らしの中に、高松人の本当の贅沢が隠れているのかもしれない。

(小西智都子)

玉藻荘では、週に一度、こうして玄関口までいただきさんが来てくれる。
旬の魚の話など自然と会話も弾む

 photo:藤田幸裕 (左下)小西智都子

論争 市街地再開発

『コンパクトシティって』

- 消費者を呼び戻す中心市街地の再生プランは？
- 大型店は〈まちづくり〉に迷惑か？
- 肝心なのは商店主の意欲と結束

―ある一家、3人兄弟妹の会議から―

おやじ（長男）＝中心市街地の3代目商店主

兄貴（二男）＝大手ショッピングセンター（SC）の店員

WW（長女）＝Working woman キャリアの独身女性

WW　最近「コンパクトシティ」っていう新語を聞くけど、どういうことなの。

おやじ　郊外に大型店や住宅を増やしていくのでなく、空洞化しつつある昔ながらの中心市街地に商業施設や住宅を誘導して人口を増やし、盛り返そうという「まちづくり」作戦だよ。集い、商い、住まいの機能を凝縮させる。市街地の効率的な高密度（コンパクト）利用ってこと。

WW　なぜ、わざわざそんなことを始めたの。

1万㎡以上の大型店を規制

おやじ　地域の顔ともいえる中心市街地が寂れていくからさ。シャッター通りって言うだろう。人通りが絶えて、夜間の一人歩きが危険になるほど人けがなくなっていく。日本中の地方自治体や商店街が抱えこんだこの大問題を解決する手法として登場したわけだ。自治体も財源難で、建物や人々の移動先の郊外に道路や水道などのインフラを広げる余力がなくなってきたこともある。拡散現象に追いつかなくなってきた。

WW　推進する法律も、この前の国会で通った。いわゆる「まちづくり3法」だ。その結果、床面積1万㎡以上の大型集客施設は、郊外に建てられなくなる。狙いは大型ショッピングセンター（SC）の規制。出店が原則自由から原則禁止になった。一方で、中心部の商業施設や住宅、公共施設などには、いくつかの補助事業や特例を設け、税制も緩和して財政支援を繰り出し、建設を促進させる。これによって、郊外に流出している買い物客を中心市街地に呼び戻そうというわけだ。

おやじ　要するに全国各地で、イオン（ジャスコ）やイトーヨーカドーなどの大型SCが郊外のバイパスや幹線道路沿いに続々進出したため、街中の商店街が沈没してしまった。中心部を建て直すには、まず大型店の郊外立地をやめさせようという政策。かつて、大店法の規制を撤廃し、SCやスーパーの建設を開放したのと逆の方針だ。

WW　でも、住民というか消費者が、商店街より大型店がいいと選んだからSCが増えたのでしょう。駐車場があり、いろんな店でまとめ買いできても、買いたいもの、欲しいものがなければ行かないわ。SCのおかげで、どんな田舎でも最新の流行を楽しめるようになったし、豊かさを実感できたと思う。

兄貴　ピンポン。そうだよ。商店街が寂れたのは、消費者が寄りつかなくなったのが原因で、魅力がないからさ。流行遅れで、品数は少ない。それに安売りセールも少ない。店主や店員と顔見知りっていうのも善し悪し。だいたい、商店主がトレンドをつかむ努力をしているのか疑問。旅行だ、祭りだと内輪のことにしか関心がなければ、消費者からそっぽを向かれて当然じゃない。

誰が見捨てた商店街

おやじ　人の流れを変えた責任は行政にもある。県庁舎や市役所が老朽化し手狭になったからと、遠い郊外に移転させる。公立病院や県立大学も同じ理由で都心部から追い立て、中心部の空洞化に手を貸している。けしからん話だよ。お役人や学生は地方都市の繁華街では、安定した固定客だからね。地域のシンボルが中心地から消えるのは、大型店の進出より打撃は大きく地盤沈下を早める。

WW　そうね。あこがれの大学に入ったと思ったら、周りは田んぼや新興住宅地で、ディスコのひとつもないなんて話を友人からよく聞いたわ。

兄貴　中心部が寂れるのは、商店主自身にも問題があるのではないかな。郊外にできる大型店の反対運動の急先鋒だった商店街幹部の店が、実は、その大型店が開業してみたらテナントで入っていた。相当にいい場所に。しかも、商店街の店は閉めて。なんて言う話もあるよ。

WW　シャッターを降ろしたままの店がアーケードにあると、それだけで、雰囲気が悪くなるわ。周りに迷惑をかけているっていう意識がないのかしら。歩きタバコと同じね。

おやじ　空き店舗で商売を始めたがっている若者は多い。「チャレンジ・ショップ」と名付け、空き店舗を組合や商工会議所が改装して貸し出す成功例も各地で出ている。だが、補助金や家賃優遇策が打ち切られると収支が合わずに撤収しがち。他人に貸すのを嫌がる頑固おやじも多く、かつての割高な家賃を下げようとしない。商店街幹部が店主に交渉に行っても、「余計なお世話」「おれの店だから構わないで」と追い返されることもある。

兄貴　商店主や商店街が、もっと危機感を持って抜本的対策を考える気にならないと、法律を改正しても効果は疑問だな。大型店を閉め出しただけで、中心市街地に賑わいが戻ると考えるのもどうかと思う。

WW　そうよ、自然がいっぱいの郊外に移り住みた

昭和35年頃、現在のドーム広場付近。高度成長時の丸亀町

◎まちづくり3法
都市計画法、中心市街地活性化法、大規模小売店舗立地法（大店立地法）の3つの法律。中心市街地の再生を目指すために都市計画法と活性化法を改正した。郊外での大型店規制が最大の政策転換だが、中核となる商店街を活性化させる道筋は明確でない。主役となるべき商店主たちの意欲と、その組織化が肝要である。百年先を見据えてプランを練り、組織力を高め、自力で再開発に取り組む高松市丸亀町の商店街組合は、その意味で全国的に注目されている。

明治期の中川時計店、以前は壱番街ビルの敷地にあった。木造の時計台が、とても印象的

いという人もいるはず。車社会で行動半径は昔と比べられないほど広がっている。そんな暮らしの中で、大きな駐車場を備えた幹線道路沿いの大型店はとっても便利。都心のコンビニと同じよ。

　特定の有名専門店がテナントとして全国のSCに登場してくるのは、消費者が望んでいること。スターバックスやタワーレコード、無印良品、ユニクロなどが身近になることで、東京の人と同じライフスタイルを楽しめる。個性を主張しながらも、トレンドに乗る快感も味わいたいの。商店街でそんな店を受け入れてくれれば、良かったのに。

おやじ

都市景観への無関心が問題

兄貴

つまり、郊外型大型店は住民が選択したものであり、消費者の需要を巧みにすくい上げたからこそ増え続けた。中心繁華街の没落は、実は、大型店の進出だけが原因ではなく、都市計画というか町並み作りにも問題があるのではないかな。

WW

私が毎年必ずヨーロッパ旅行に行くのは、中世から続く美しい町並みに出会えるから。

WW

まず、電線と電柱がない。石畳の路地やほとんど同じ色調の屋根や塀など、思わずカメラを向けたくなるあの気持ち。どうしてこんな街が日本にないのかなと感じるの。

そこに根源的な課題がありそうだ。土地や建物、その集積の町並みは誰のものかっていうこと。日本は、土地所有者の個人の権利意識がものすごく強く、制度的にも尊重されすぎている。建ぺい率や容積率さえ守れば、どんな色や形の建物でも自由に建てられる。

　開発規制が極めて緩やかだ。それに対して、欧州各国は厳しい。土地や町並み環境は、みんなの物。公共物と理解されているからだ。そんな住民の意向を受けて、自治体が建物の利用目的や色彩、形状など外観をきちんと決めている。時間的にも空間的にも連続性を重んじるから、来訪者は歴史を体験できる。

そうね。ドイツのロマンチック街道なんて中世そのまま。でも家の中に入ると、外観と大違いで今風の電化製品や空調がきちんと設備されている。外はレトロでも、中はモダンな暮らし。

おやじ

その欧州で言われてきたのが「コンパクトシティ」。車でなく徒歩で歩き回れる都市を目指す。

車は都市の外側に駐車し、中に入れば徒歩や路面電車、自転車を使う。

　そのために街の中心部に主要な公共施設や商店、住宅などを集めようというのだが、もともと日本のような商店街の空洞化対策からではない。環境問題が発想の原点にある。石油エネルギーからの脱却や地域住民の連帯、コミュニティの維持など住民自治という考え方から出てきた。

住民や商業者自身が決める中心街

兄貴

そう、住民の判断次第という考え方には賛成だな。頭から、SCが中心市街地を壊した、だから規制するという議論はおかしい。地域住民の願望を全国一律の規律で排除するのは納得いかない。地域の裁量に任せればいい。

　明治時代に、鉄道が来ると牛の乳が出なくなるからと言って反対運動が起き、隣町の新駅に繁華街が移ったところは多い。同様の理由で東京の山の手線のルートから江戸期の宿場町がはずれた。幹線道路の拡張に反対したら、賑わいが移ってしまい、寂れた町もある。

　それが、百年後には、近代化から取り残された城下町や街道町が、「伝統的建物保存地区」や「小京都」として蘇ってしまう。中心市街地といっても、その中心は時代時代で変わっていく。「ここが中心」なんて誰も決めようがないんじゃないか。振り子のような有為転変は、歴史のならいかもしれない。

WW

でも、中心になれるかどうかは、商店街や住民がどれだけ地域に愛着を持って、将来を見据えながら街を見ているかにかかっていると思う。老人になっても、孫ができても商売を、暮らしを続けるという覚悟があるか。次の世代に引き継いでいく意欲があるか。そんな商店主たちが支える商店街なら、SCに負けない「中心街」になると思う。（高尾　朔）

illustration：pen artist santacc

左／昭和22年頃、現在の百十四銀行付近。すずらんの街灯や2階建ての街並みが特徴的
中／昭和10年頃、現在の三越付近。百貨店と言えば当時から老舗の三越
右／昭和8年頃、現在のドーム広場東側角。チンドン屋が集合、当時の大売り出し風景（岡部駛郎氏提供）

商店街に物申す

いま、話題騒然のSNS（ソーシャル・ネットワーキング・サイト）最大手の「mixi（ミクシィ）」。そのミクシィの数あるコミュニティーの中でも、特に活発な議論を展開しているコミュニティーがあるという。その名は「高松市街づくり再生委員会」。

東京在住の香川県出身者が「商店街の現状」を憂い立ち上げたもので、約半年間で同じ思いを抱いていた人たちが県内外を問わず会員になり、その数はいまや200人余に膨れ上がっている。

県内在住者や県出身者らの郷里への温かくも厳しい意見やアイデアがいっぱい詰まっています。今回はこのコミュニティーで話題となった主な意見や提案を中心に、高松丸亀町商店街振興組合から回答を得ました。編集後記に代えて掲載します。題して「商店街に物申す」。

「商店街に物申す」へのご意見、ご感想やご質問などをお寄せください。
Anki「商店街に物申す」係
FAX 087-823-1433
E-mail ichibangai@marugamemachi.ne.jp

Q 丸亀町商店街が進めている再開発プロジェクトについて、全く知りませんでした。なぜ、再開発が必要なのか。プロジェクトの具体的な中身を教えてください。

A まず「なぜ再開発に取り組んでいるか」から、お答えしたいと思います。バブル期には地価が高騰しました。これで商店街周辺には、人が住めなくなりました。人が住めなくなると、いろいろな業種が廃業に追い込まれてしまいました。残ったのは服屋ばかりだったのです。これから本格的な高齢社会を迎えるに当たり、中心部への回帰現象が起こってくることが予想されます。車に依存しないで快適に住める街をみなさんが欲しています。多くの人が街中に帰ってくるでしょう。その時までに、不足した業種をもう一度そろえなければなりません。専門用語では「テナントミックス」と言いますが、みなさんが快適に暮らせる街となるよう、店舗を整備し直さなければならないことが再開発の最大の目的です。

これから商店街全体に統一感を持たせるとともに、必要な業種を必要な位置に必要な規模で配置していく作業を行っていきます。それには組織が必要です。これを合理的に実施するのが「まちづくり会社」です。これから商店街を7つの街区に分けてリニューアルしていきます。A街区は再開発のトップバッターで、5年間で商店街を一新するのが目標です。

Q 駐車料金はこれ以上安くならないのですか。駐車台数はどれくらい確保しているのでしょうか。

A 将来的には必ず安くしていきます。現在も「たかせん」と提携したタウンカードの加入者は、商店街などでの購入額に応じて、3時間から1時間を無料にするサービスを実施しています。駐車台数は三越高松店前に建設した新駐車場を含めると5カ所に整備しており、約1000台分を確保しています。

Q タウンカードに加入するにはどうしたらいいのですか。年会費などはいるのですか。

A お手数ですが、詳しいことは「たかせん」にお問い合わせください。よろしくお願いします。HPアドレスは〈http://www.netwave.or.jp/~takasen/〉です。

Q 商店街を歩いていると、自転車が多く、ちょっと危ないような気がします。自転車置き場を整備してほしいのですが。

A 再開発に合わせて順次整備していきます。A街区周辺では迷惑駐輪や放置自転車の追放と景観や環境に配慮して、3基の自動地下駐輪場を整備しました。3基の総収容台数は432台です。1日100円で1時間以内は無料（1時間以内なら100円が返ってきます）。ボタンひとつで自転車がスッと入り、ボタンひとつでスッと出てくる仕組みです。所要時間は10秒くらいです。

Q 商店街の公式サイトは大変見づらいので困っています。

A ホームページ（HP）はA街区のグランドオープンに合わせて、これまでより見やすく、分かりやすいHPにリニューアルしました。再開発の概要やショップ紹介なども網羅しています。HPアドレスは〈http://www.kame3.jp〉です。ぜひ、ご覧になってください。

Q 商店街に人を呼び込むためには、バスや電車など公共交通機関との連携が欠かせないと思います。どうなっているのですか。

A 現時点では公共交通機関とは連携していません。振興組合では昨年11月から、サンポート高松と丸亀町商店街の間を周回するショッピングバス「まちバス」を運行しています。JRなど公共交通機関が集まるサンポート高松とのアクセスを向上させることにより、商店街に来やすくするためです。運賃は100円で、1日25便を無休で運行しています。

Q 人が集い賑わうには、飲食店が必要です。商店街にはそんな店が少ないように思います。

A 振興組合などは再開発に併せて「高松地産地消」という会社を立ち上げました。これは社名の通り「地産地消」や「スローフード・スローライフ」などをテーマに、商店街に食の集積を図るのが使命の会社です。モデルケースとして取り組んでいる「丸亀町亀井戸水神市場」もその一環です。これからレストランやカフェを展開していきたいと考えています。

［季刊誌］
高松スタイル
Anki
Vol.01 December 2006［あんき］

編集・制作 ■「Anki」編集委員会
編集長 ■ 高尾　朔
アート・ディレクター ■ 仁田貴夫
エディター ■ 小西智都子
白井ひとみ
人見訓嘉
小島　遼
廣瀬将人
仁田貴夫
デザイナー ■ 葛西友紀
木村由香
眞鍋亜希子
フォトグラファー ■ 藤田幸裕
中村政秀
丸田　歩
田中勝次
イラストレーター ■ 佐藤高穂
pen artist santacc
広田桂子
印刷 ■ 滝川印刷株式会社
発行 ■ 高松丸亀町壱番街株式会社
高松丸亀町まちづくり株式会社
高松丸亀町商店街振興組合
〒760-0029
香川県高松市丸亀町13番地2
丸亀町ビル
問い合わせ先 ■ 高松丸亀町壱番街株式会社内
tel.087-821-1432
fax.087-823-1433
ichibangai@marugamemachi.ne.jp
http://www.kame3.jp

川島 猛さんに続く
若き地元クリエイター集まれ!

誌面に素敵なイラストを描いてくれたpen artist santaccさん（20・21P）と広田桂子さん（22・23P）は、高松で活躍する若手クリエイター。このように「Anki」は、地元で活躍する次世代アーティストを応援します。作品はイラスト、立体、クラフト、写真など、誌面上で表現できるもの。興味のある方は「Anki」編集委員会までお問い合わせください。

◎次号は、2007年3月10日発行です。
定価200円（税込）

高松スタイル「Anki」へのご意見、ご感想やご質問などをお寄せください。
ＦＡＸ 087-823-1433
E-mail ichibangai@marugamemachi.ne.jp

©高松丸亀町壱番街株式会社 2006
本誌記事の無断転載を固く禁じます。

Q 商店街はいろいろなイベントをやっていますが、情報発信ができていないので、あまり伝わっていないようです。

A これについてもＨＰで対応しています。また、再開発の情報などを満載したかわら版「かめＴＩＭＥＳ」を発刊しました。今後、この媒体も利用して、タイムリーなイベント情報なども発信していきたいと考えています。

Q 扱い商品が一目でわかるショップ情報がほしい。

A Ａ街区では再開発に合わせてパンフレットを作成します。この点についてもＨＰや「かめＴＩＭＥＳ」で対応していきます。

Q おむつを取り替える台があるなど、乳幼児対応のトイレを整備してください。

A Ａ街区の東西両館（東館が４階、西館が２階）は乳幼児対応になっています。これからもこれを標準に整備していく方針です。

Q 「かめＴＩＭＥＳ」について詳しく教えてください。どこでもらえますか。

A 「かめＴＩＭＥＳ」は再開発の情報を中心に、丸亀町のあらゆる情報をタイムリーに発信する地元フリーペーパーです。商店街の各店舗に置いています。ただ、発行部数は５０００部程度なので、この点はご了承ください。

Q 「キッズＯＫ」のような張り紙をするなど、子ども連れでも入店できることを提示してほしいと思います。表示してもらえると安心して入店できます。

A 子ども用品を販売している店がないなど、子どもを連れて来る機会が少ない商店街になってしまったこともあって商店街の一番弱いところだと認識しています。これから誠心誠意やっていきます。

Q 本当に「使える店」が少ないと思います。子ども、大人、お年寄りらが、それぞれ楽しめる店をそろえてほしい。

A 再開発でテナントミックスを行い、各世代から支持される店をそろえ、幅広い層から「あって良かった」と言ってもらえる商店街をつくっていきます。

Q フリーマーケットを開催するとか、子どもたちが郷土の歴史を学べる場などもあればうれしいな。

A 従来あった丸亀町レッツよりも、コミュニティー施設は大幅に拡充しています。みなさんにどんどん活用していただきたいと思っています。文化教室、料理講座など、さまざまな用途に対応できるようにしています。

Q 郊外の大型店によくあるショッピングカートを置いてほしいのですが。これがあると買った商品を駐車場まで運ぶのが楽になります。

A 現時点ではショッピングカートの導入は考えていません。ただ、さらにグレードの高いサービスとして、振興組合が専用ポーターを置き、お客さまの購入された商品を駐車場まで運ぶというホテル並みのサービスが実現できないか、と検討しているところです。

Q ちょっと座れて、休めるベンチなどを増やしてほしい。

A これも再開発に合わせて順次配置していきます。Ａ街区では約50脚のベンチを用意しています。テーブルも備えており、くつろいだ雰囲気の中、楽しいひとときを過ごしてもらえるような空間を創造していきます。

Q 全体的に、接客サービスがよくないと思います。

A この点は振興組合も強く認識しています。商店主の認識不足もありますが、徐々にですが確実に意識改革は浸透しています。また、大手資本から専門のゼネラルマネージャーを迎え、これから個店ごとに接客を含めた総合的な指導を実施していきます。これはＡ街区だけではなく、商店街の全店を対象に行っていく方針です。

illustration：広田桂子

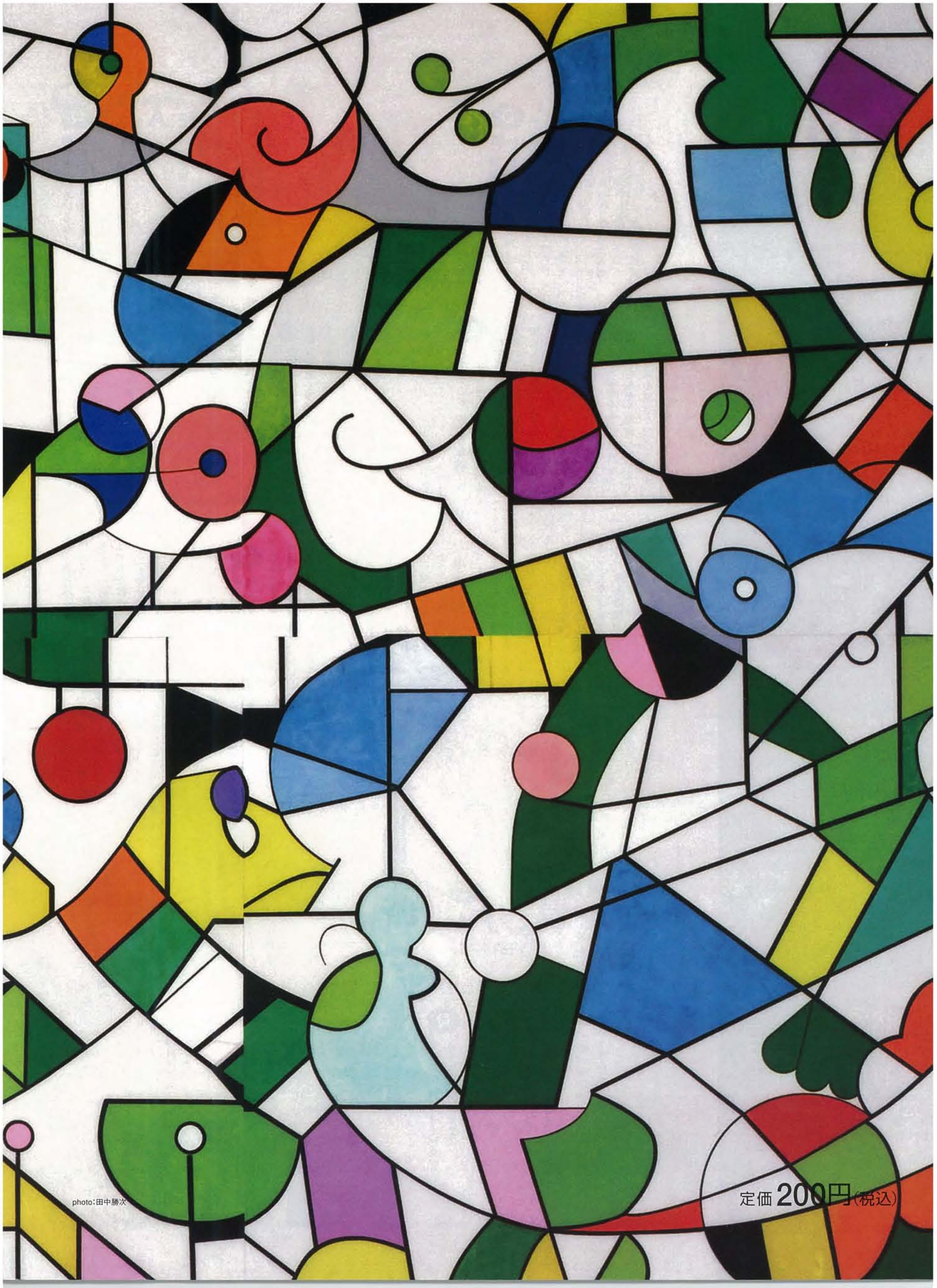


photo:田中勝次

定価200円(税込)